第３章　村松家の歴史

目　次

３－１　村松家・時代の主人公

３－２　村松家住宅・建築の変遷「近世・近代・現代」

＜住まいの自分史＞・・『暮らしの生脈（主人公が生きた脈絡）・ＤＮＡ』

３－３　物語「村松家に生きた人々」

～　(1)　村松健斎・勝格弥・村松正次郎とその時代～

３－４　桃園・村松家『暮らしの生脈ＤＮＡ』年表（別冊）

＜住まいの自分史年表＞

３－１　村松家・時代の主人公

江戸時代中期以前 (代々伊助と助右衛門を名乗る）

位牌に観る代々の伊助・助右衛門は村松家の先祖　　日蓮と吉田兼益の扇面篆刻、武田信虎の免許、信玄の家臣小幡因幡守免許、顕信坊（房）村松家塔頭寺由来 .

伊助の時代（寛政八丙辰年 1796~ 明治八丙子年 1876）

幕府崩壊の兆しの中、しなやかに生きる伊助の手腕。西郡煙草（組合方式にて皆畑場で栽培、桃園の組頭）、酒造り（自前の醸造蔵にて醸造熟成す）、木綿の製造元卸で現金収入の源を作る。名主となった伊助は、和宮様御下向時に街道筋の社会的な役割を行う、村松の遺伝子を引き継ぐため縁戚勝家より健斎を婿に、北村家より嫁を迎え両養子とし、医業を取り入れ一層の社会的な役割の強化する。

健斎の時代（文政九丙戌年 1826 ～明治 18 年 1885）

桃園・医師健斎は兄四代目勝格弥医師と外科に長ずといわれた。幕末の地震・台風・火事被害やコレラ等流行病による民救済のため活躍す。自らの雅号を『清吟書屋』とし、教育にも貢献した。生業の充実と業態の転換を図り , 資本家として金融貸付商会（M 11 年・銀行) を鰍沢に自ら興し、事業家として横浜正金銀行（M 13）に出資する。山岡鉄舟が宿泊したり、谷干城（西南の役司令官）との関係は、板垣退助（幕末甲府開城の官軍司令官）やその後の富岡敬明 (権参事) 藤村紫朗 (県令）に起因するか、揺れ動く時代の在野の主人公であった。長子勝家の養子になり『臨床応用硯北日誌（上)』を記した五代格弥が民権運動に力を注ぐことを観ると、板垣退助等との出会いがあったと思われる。

正次郎の時代（文久 2 年 1862~ 大正 13 年 1924）

村松正次郎は、兄五代目勝格弥（健斎の長男として勝家に養子に入る）の医業を通しての社会活動（自由民権運動）の影響を受けながら、雙桂精舎塾・島田篁村（重礼）にて漢学を修行し、その重鎮になっていく。山岡鉄舟の葬儀の折での高い席に座った経緯は、父健斎との関係であろう。数歳上の叔父勝謹爾（４代勝格弥の嗣子、東京帝国大学医課別科卒）と上京中、謹爾が当時の最高医学を究めるを傍らに見、正次郎は谷干城等に漢学を師事し、父健斎を乗り超えた世界に互いに入っていく。実業の正次郎は資本の拡大と同時に、地元では明穂村助役として行政にも関わった。経済の渦に巻き込まれる状況下、文庫蔵を創設し、真髄の漢学教書を蔵いっぱい蔵書した。後に貨車一杯あった蔵書は金融・不動産と共に資財として何処かに譲られていった。今も遺こる文庫蔵は正次郎の書斎として使われてきたと伝えられている。父健斎の雅号『清吟書屋』を、兄５代目勝格弥の「臨床応用硯北日誌（上)」と共に、村松家の精神を遺した記憶の蔵として、最後まで後世に伝えていく意思を貫いた。

重雄の時代（明治 29 年 1895　3 月　日～昭和 49 年 1974　1 月 27 日）

村松重雄は五代勝格弥（琢太郎・健斎の長子、勝家に養子)、伯父勝謹爾 (4 代勝格弥の嗣子・健斎さんの弟)、父正次郎の精神的な遺産を引き継ぎ、重雄独自の世界を開いていく。社会運動家加藤シヅエ（女性の参政権など)、石本男爵（三井三池炭鉱労働改革）夫妻に共鳴し大同洋行（神田神保町）を設立した。大正 13 年 1924「労働内閣まで」澤田謙著を出版し、また医家である家系での社会性を超えた洋書の翻訳出版を大同洋行出版局として公衆衛生、予防医学の祖「ルイ・パストゥール」佐藤俊三編を翻訳出版した。先代たちの社会活動を背負い、それを乗り越える国内外へ視点を変えて、洋書翻訳出版業を企業化した。大同洋行はデモクラシーの流れと治安維持法の狭間で、戦前の激動期に入り、社会性を独自の美意識として大同洋行食堂部「レストラン・メッチェン」に変えて、世のインテリたちの愉しめる場として記憶に遺していった。美味しいアイスクリームは今でも忘れられない遠い記憶として遺こる。

昭和後期からその後

村松重雄の後を長男重義が継ぎ、長寿であった重雄の妻「ちゑ」と長男重義を中心に支えあう。後に財界の通訳として活躍する映子及び現当主は村松家住宅を社会的な資産として位置付けて、生活を通した村松家の近代の歴史を平成 15 年 1 月 31 日付け、国の登録有形文化財・村松家住宅（主屋・登録番号 19 － 0041、商家蔵・19 － 0042、文庫蔵・19 － 0043、厠・19 － 0044）として後世に遺す意思を固め、現代に至っている。

久保田　要　　記

３－２　村松家住宅・建築の変遷

「近世・近代・現代」＜住まいの自分史＞・・

『暮らしの生脈（主人公が生きた脈絡）・ＤＮＡ』

目　次

序（建築の変遷を紐解く手がかり）
1　嘉永年間以前の村松家住宅
1－1－1　場所の役割―その１「青龍の地」
1－1－2　場所の役割－その２「駿信往還と馬」
1－2　名主・長百姓伊助「イ口（ニンベングチ）」の主力生業は造り酒屋
1－3　「商蔵（みせ）と主屋の複合建築」
商人（あきんど）の暮らしを反映した建築の普遍性と街並み
1－4　嘉永二年に何が起きたのか
1－5　伊助のもう一つの仕事　「和宮下向助郷顛末」
2　慶応年間（幕末）の村松家住宅
2－1　様相が変わっていた村松家住宅
「（嘉永二年 1849 ～慶応元年 1865）の 16 年間」
2－2　地震・大雨・火事・コロリ
「天変地異と疫病」が生活や建築を変えた
2－3　村松健斎（文政九丙戌年 1826 ～明治 18 年 1885）の登場
「伊助から健斎へ」
2－4　村松家住宅・主屋は平屋建茅葺であった。
3　清吟書屋「健斎の雅号・村松家の精神的な礎」
3－1 村松健斎の清吟書屋はどのように使われていったのであろうか？
3－2　村松健斎モダニズムに挑戦・「アーチ枠八窓の２階建て」に
－2－1　主屋を２階建てにした目的は？
－2－2　素材、形態・意匠的には擬洋風建築
（藤村式）以前の居留地住宅モデルか。
－2－3　葉タバコの乾燥や漢方用の甘草用、養蚕に関係するものは？
－2－4　1 階床下暖房装置、
２階の床引き戸の痕跡は何を物語るのだろうか？
－2－5　その他の要因
－2－6　２階建てモダニズムのまとめ
3－3その後の村松家住宅『正次郎から重雄の時代・謹爾の役割』
結び（伝えられること、遺していく志（こころざし）・力（ちから））

序（建築の変遷を紐解く手がかり）

桃園・村松家住宅は、何代かに渡り手を入れ増改築されてきた履歴を持っている。この度、調査・保存修復の機会に恵まれ、その過程の中で、現実に見えている素材をどう扱うか、修復の履歴を後世にどう伝えたらよいか、手を掛ける前の迷いは尽きなかった、これからも関わる限り尽きないと思う。モノの価値や感覚だけで解決してしまえば、技術の伝承・再生の意としてそれはそれでよい。しかし私に依頼された修復のテーマはそれだけではなかった。

今も生活している家族の方々に、この建物での体験や遺された記憶をうかがい、整理していくうち、今生きている子孫たちのルーツが、一つ一つ見えてきた。平成 11 年に長寿（99 歳）で他界した『村松ちゑ』さんや『村松重義（ちゑの長男享年 73 歳）』さんの後、残された家族たちは、この家をどう保持していくかが大きな課題であった。後継者村松映子を始めとする姉妹たちは苦慮の結果、家をどう遺すか最良の手立てを模索していた。

その後、国道 52 号線「駿信往還」拡幅の事業で商家蔵の収容が余儀なくされた。そんな背景の下私のところに一本の電話が入った。蔵を遺したいのだけれど、それだけでなく私たちの『心の故郷を遺したいの・・・』との、心がふれあう出会いであった。何かに突き動かされるまま調査していく中、見えてくるものは手を掛けた御職人さんたちの知恵の影に隠れた建築主の発意や創意であった。

原七郷・桃園という場所性で生きた先祖たちの重層化された記憶や履歴はすぐに消えるものではない。むしろ“もの”の背景としての時代性や環境が創り育んできた上で、現代の暮らしが営まれていると観えてくるのである。

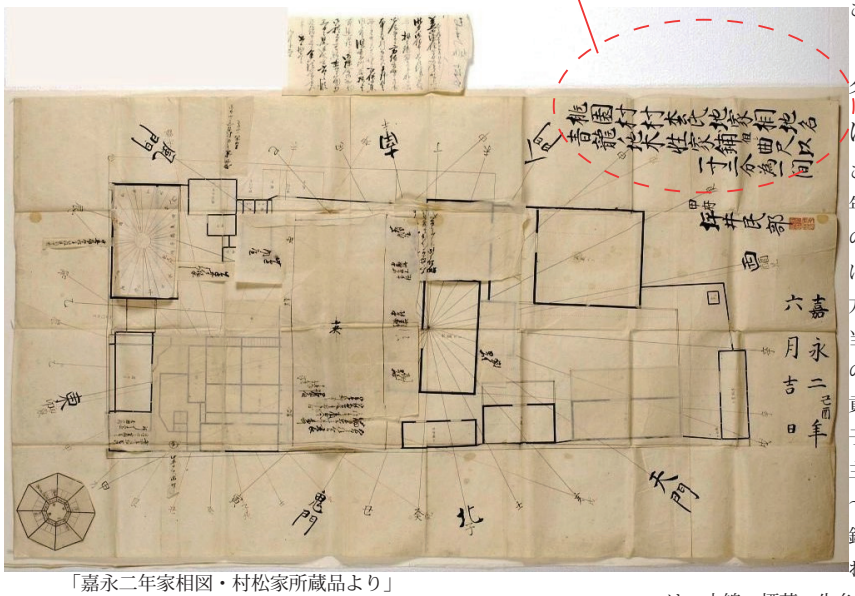
「場所と建築とヒト」のなせる物語は、『暮らしの生脈（主人公が生きた脈絡）・ＤＮＡ』が育て受けつないできた歴史の時空間として、未来へと投げかけるものである。村松家住宅の建築の変遷「近世・近代・現代」を通して、この場を体験し触れ合う方々『ご自分の住まいの自分史』に置き換えていただけたら幸いである。

久保田　要

1　嘉永年間以前の村松家住宅

1－1－1　場所の役割―その1「青龍の地」

村松家の所蔵品の中にある風水図がある。大きさ一畳近くの比較的大きな図面である。これには桃園村村奈氏地家相地名青龍ノ地木家鋪但し曲尺以一寸二分為一間、と書かれている、確かに村松家のものである。また続けて甲府、坪井民部なる風水師の落款、印がある。間口１６間、奥行き約３５間弱、測量、作図共しっかりとした図面である。青龍とは天の四方「東・春：青龍（せいりゅう）・西・秋：白虎（びゃっこ）・南・夏：朱雀（すざく）・北・冬：玄武（げんぶ）」の神獣で東を守る青龍である。ここで青龍ノ地、木、家、鋪（ミセ）とは、村松家そのもののことであるが、何処から見て東・青龍の地であるかは、地形的に一目瞭然、現桃園神社（旧八幡宮社）から見てである。ここで神社と村松家の関係は、家人の思い出や、神社で祝詞を挙げた先祖の話しなど、諸説後の研究に委ねることになろうが、ここでの青龍の地という表現は、神社の境内と並行し真東に位置する守りの役割が村松家にあったということがいえる。



「嘉永二年家相図・村松家所蔵品より」

嘉永二巳酉年（1849）六月吉日とある。年代はペリー来航 1853 年７月８日（嘉永六年六月三日）の四年前、日本近海に黒船が接岸し、幕末維新の足音が俄かに聞こえだした頃である。

「幕末明治大正回顧八十年史・第一輯　東洋文化協会・発行より転載」

1－1－2　場所の役割－その２「駿信往還と馬」

嘉永二年の古図の街道沿い南土蔵の西に厩（うまや）（馬）、槝家、下男、浴室、厠等がある。ここで江戸時代のこの地域では、牛馬の役割としてどんな仕事があったのだろうか考えてみよう。

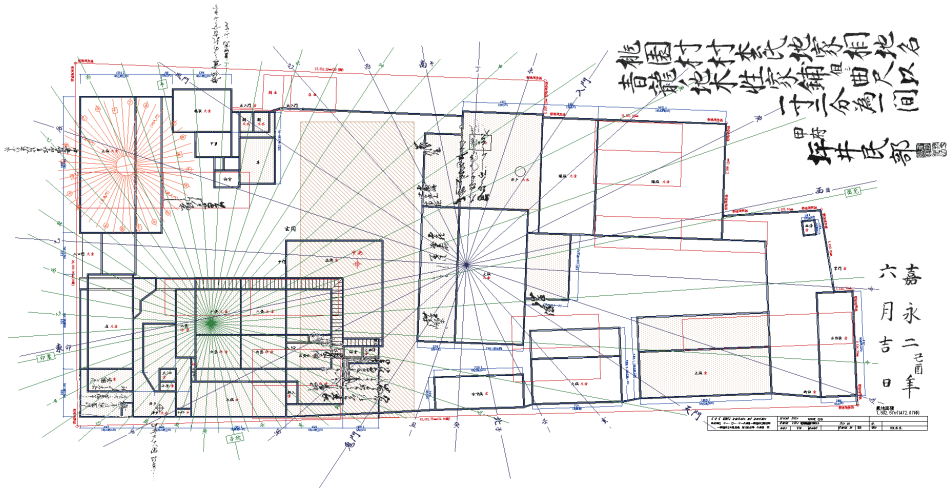
牛馬の大きな役割は、農作業のための農耕用・堆肥作りなどが一般的である。しかし、村松家は純農家ではない。古地図には馬と書かれている、どのような役割があったのだろうか、駿信往還での村松家の役割との関係で見てみると物資運搬が一番値するのではないだろうか。問屋・村役人などを兼ねていた脇陣としての機能など、あらゆる事柄に関係してきた家であるため、地域物資運搬や駿信往還の宿駅制度（公用の人馬継立の業務＝御伝馬制）や臨時の助郷村としての補助的な馬の常備にも関係していたのであろう。駿信往還の大きな役割のなかの一つに、富士川水運を利用しての御廻米（甲府代官支配下の貢米や松本領、諏訪領の貢米）を輸送するため、鰍沢口の蔵屋敷まで無事輸送すること等があった。

その途中の問屋・村役人としての村松家にはその道中の安全を助ける役割があったのである。この厩（外厩）は馬と書かれているため、馬そのものの役割を直接表記してあるものとして読み取ると、以上の事柄の意を踏まえて書いた甲府在住陰陽師坪井民部の計画の意図が分かる。後にこの厩と厠の位置を 90 度南に振りながら、実質的な出入りの門を造り、厠や厩から出る肥料は当時としては価値の高いものである。堆肥の出し入れとしては、機能的に変更したかったことなどや、敷地の中を有効利用したかったことなどに関係したのであろう。

1－2
名主・長百姓伊助「イ口（ニンベングチ）」の主力生業は造り酒屋

この時代、村松家の当主は長百姓伊助（寛政八丙辰年 1796~ 明治八丙子年 1876）52 歳（櫛形町史）のときである。伊助が櫛形町史に最初に出てくるのは文政九丙戌年二月 1826 組頭伊助 30 歳の時「原方村々肥粕糠注文定二付」の書状にて、「名主宛、当年油かす高値につき年貢手当・・・」とある。この頃すでにこの原七郷における村の組頭で名主に年貢の心配（減免書）を書き付けていた。天保十一庚子年二月 1840 酒造人・伊助は酒造減石申上書、名主伊助―桃園村上納金願「金二両外二名同額・・・」～嘉永元戊申年十二月 1848 長百姓伊助―桃園村夫銭割出入（年貢帳）52 歳まで数々村の長として関わりを持っていたことが分かる。この原七郷の産業は、木綿、煙草、生糸、や伝統的農産物では小梅、枯柿（さらし）の類である。信玄の時代以前信虎時代（信虎御朱印書状・大永二壬午年 1522）より、小梅、枯柿の免許は取得していた、この頃の村松家の生業は表に出てくるものとしては、煙草や酒造りであろう。この嘉永の古図（風水図）のなかに数々の蔵がある、なかでも一番大きな蔵は、中央より西南隅までを有する酒蔵である。敷地ど真ん中にあり、風水の中心に位置する中央の土蔵は、この酒蔵の諸機能を司る中心的な役割を持っていたことが、作業動線や開口部位置により良く分かる。伊助のもう一つの顔は、生業のほか長百姓、名主と櫛形町史にあることから、農家の中でも上層部の階級であったゆえ、単なる農民ではなく、代官所の職制に含まれる村役人であったため、代官その他の役人の見回りがあるため、それを迎え入れるための座敷や玄関（貴人口）を設けることが許されていた（＊建築学体系―日本建築史、近世の農家より）。図にも見るように、座敷を中心とする接客の場は、床の間、棚が付けられ、中門付きの庭で囲われて、他の空間とは隔していた。北西の蔵は木納家とあり裏門、御社（屋敷神様）、八幡宮社森と隣接境となる。その東塀囲いの内には和紙で覆ってあり取毀し予定かの軒卸一間半、五間半の土蔵（慶応元年風水図では敷地外で無くなる）、穀蔵一間半×三間、次に味噌蔵一間×三間とつづく。中央より西方は、生産、発酵、熟成、保存のゾーンであることが分かる。中央より東は街道沿いの店と生活の場である。

駿信街道沿いから観る村松家はどんな風景であっただろうか、道沿い右手に店（間口４間、奥行 2.5 間）があり、一間半の門を中心に左手（南）に蔵がある。一見、長屋門的な街道沿いの造りであるが、店蔵は道沿い開口部四間という大きな店構えしていた。その脇北にメイドさん（下女とある）の間が接し、西に二間の土間がつづく。ここでの土間は路地状でナガシ、

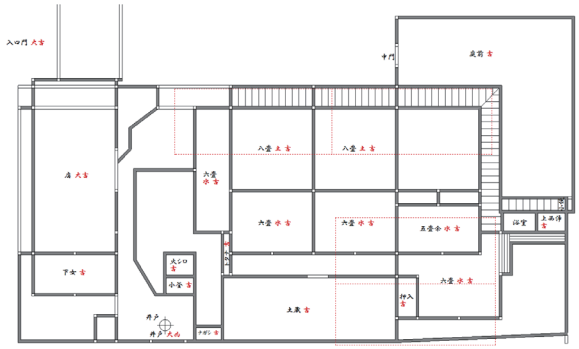


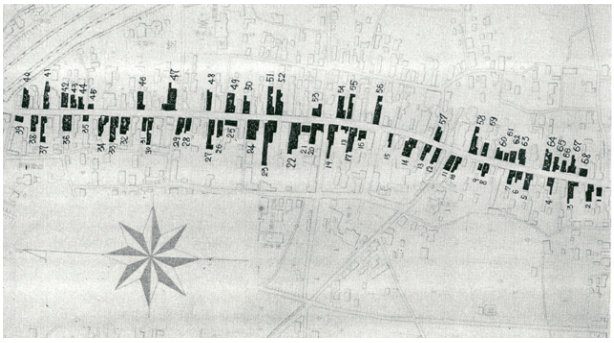
裏　　表

三輪宮神代職
平川帯刀平昌信
神祇遍閉行事鎮宅堅固子孫繁昌守護
謹而諄辞竟白
嘉永二酉歳五月二拾有五日　行之

嘉永二年五月の棟札（神札）とあり、このとき造営したことが分かる。この竹川宅は、それ以前からあった村松家図ととても酷似している。昭和40年代の調査資料からの転載であり、敷地全体像が見えないのでなんともいえないが、土間落間台所勝手と店蔵と機能的にしっかりした「商家蔵＋主屋」の平面をしていることが分かる。時代が後先になるが、下図に示すは駿信往還宿場として、桃園とは比べることが出来ないほどの盛況であった小笠原宿である。同宿の昭和40年代の蔵造りの調査図があるのでここに載せておこう。

小釜、火ジロ、トダナ、井戸などが一段低い板の間で繋がっていた。店と屋敷とをつなぐ空間として、一日中活発に動きのある商家の裏方の場であり、生活の中心の場である。奥には寄付き、中座敷、奥座敷、内庭、廻り縁側、浄、浴室と六間の構成をしている。

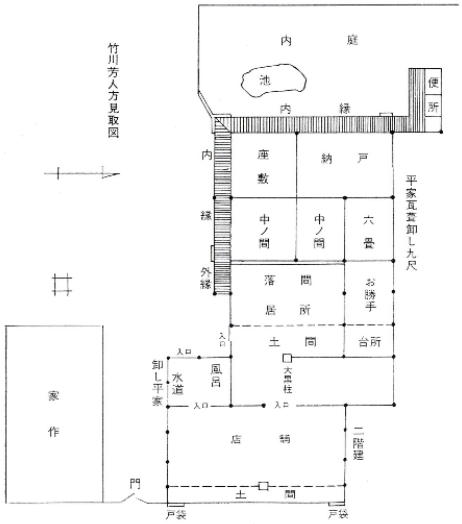




小笠原宿の蔵のある図「昭和40年以前・櫛形町史より転載」

１－３　「商蔵（みせ）と主屋の複合建築」商人（あきんど）の暮らしを反映した建築の普遍性と街並み

因みに類例として、同年代の貴重なプランが小笠原商店街の商家に見ることが出来る。下図は吉野家酒店（竹川芳人方、櫛形町史より）である。



昭和40年以前「櫛形町史より転載」

つい最近までこのような景観を呈していた原型が村松家の嘉永二年の風水図にあることが判明した。この町の風景や人々の暮らし方が幕末～昭和と途切れずに関係していたことが浮き彫りされた。

この風水図を熟視していくと、嘉永年間以前より保っていた村松家の暮らしぶりは、商家と生活を合わせ暮らした街道沿い建築の特殊解として見ることが出来る。このように他の類例を重ね合わせていくに連れて、形態的に普遍性を持ったプロトタイプとして存在していたことが実証されていくであろう。

１－４　嘉永二年に何が起きたのか

さて、村松家の伊助は嘉永年間に何が必要でこの平面計画を見直したかったのだろう。これまでの使用してきた建築で必要性がなくなった箇所、これから必要とされる場所の良し悪しを問いかけるものとして、この風水図が必要になったのである。この風水図が物語るものとして、①どうして甲府在住の坪井民部なる人が関わったか（人脈、生業関係？）、②生業の変化はどうであったか（景気、年貢、飢饉）、③生活の大きな変革が起きたか（代替わり跡目相続、結婚問題？）など、時代をタイムスリップして、当事者として見つめてみよう。組頭、長百姓、名主、酒造人等、伊助の公的関わりは夫銭割等年貢に関係することが多い、当然信虎時代より店の商いの権利を取得していたことで、小商人達の出入りはかなりあったことであろう。甲府との関係は、その小商人達との商いの中で、名産品の売りとして、木綿、木綿布、煙草、小梅、晒し柿、酒等があり、逆に買いとして、他地域の生糸などのものを置いていく売買の関係があったことは当然である。大消費地の甲府や富士川水運で清水などとは、そのような流れの中で情報も密接につながった関係を持っていたことであろう。村松家はこの地

1 小松乾物店
2 古久田
3 市川酒店
4 杉山洋品店
5 小松金物店
6 飯久保医院
7 長田モーター
8 鳥正
9 みのりや
10 つるや
11 山屋
12 近藤洋品店
13 飯久保葬具店
14 吉野屋（酒店）
15 斉藤正守
16 第一生命
17 斉藤陶器店
18 石川装身具店
19 吉野屋（洋品店）
20 村田屋支店
21 内田呉服店
22 沢田屋
23 金丸砂糖店
24 金丸親太郎
25 竹屋
26 久・星
27 フタバ洋品店
28 ながとや
29 保坂一男
30 長沼洋品店
31 長田薬局
32 井上茶店
33 井戸屋
34 井戸屋
35 万屋
36 近藤薬局
37 長沼忠治
38 岡部医院
39 飯久保酒店
40 古川屋
41 のばら美容院
42 野田悦男
43 佐久間五六郎
44 早川ミシン店
45 深沢金物店
46 斉藤時計店
47 望月康之
48 常盤産業
49 藤巻肥料店
50 天満屋
51 近藤美容店
52 昇展堂
53 まるや履物店
54 深沢家具店
55 金丸金物店
56 白木屋
57 長谷川金三
58 高野豊重
59 渡辺米店
60 朝日生命
61 石原衣料店
62 日ノ丸薬局
63 扇屋
64 かねぼし
65 依田肉店
66 今村洋服店
67 つるや
68 加藤電気器具店

「昭和 40 年以前・櫛形町史より転載」

域だけでのものさしでは理解できないことがそのようなことから良く分かる。坪井民部は流通、決済、に関わる商人たちや、旦那衆たちの信頼おける大切な未来を見つめるブレーンの一人であったのであろう。当然甲府在住の坪井民部は、幕府の直轄地としての甲府の景気や、時代の息吹も感じて、相談に乗るだけの進取の気性や、時代感覚は持ち合わせていたに違いあるまい。施主の意思が固まるまでの迷い、希望や失敗を聞き、次世代に対しての設計図を見定め、図化するのが風水師の役割である。

ここで村松家にある計画案が持ち上がった。この風水図の中央に位置する場所に、南北に大きな建物を建設するような背景が読み取れる。酒造りの商いを大規模で行うのか、それともそれに変わる養蚕生糸などへの業態変革を企てたのであろうか。

次に、跡目相続などの家庭環境から来る変化から考えてみよう。櫛形町史の第九編・医師衛生誌では、村松家との姻戚関係にある五代目勝格彌医師は、村松家に婿養子に来た健斎（文政九丙戌年 1826 ～明治 18 年 1885）医師 25 歳のときの長男として、嘉永四辛亥年九月（1851）に生まれる。つまり村松家から医師の跡目が生まれ、この子がまた勝家を継ぐことになる（硯北日誌筆者）。健斎の父三代目勝格弥醫師は安政二年八月に 70 歳にて没することになるが、この風水図の描かれた嘉永二年（1849）は 64 歳ということになる、息子の健斎は 23 歳である。当主伊助は 53 歳である。健斎さんの兄で勝家長男 4 代目勝格弥（格斎文政二己卯年 1819 ～明治九丙子年 1876）は、この時 40 歳である。後に西郡筋の醫務取締役などを命ぜられたり、桃園学校初代校長を引き受けたりした。弟健斎が医師として村松家に婿養子に入り、村松家の世代交代が今まさに始まろうとする予兆の時、両家とも最大の意識が通い合っていたことであろう。このようなことから、儒醫師 4 代目勝格弥（格斎）や健斎醫師の儒醫学を学んだ教養や、医学の影響を色濃くしていく関係へと変わっていくことが考えられる。次世代への夢を描いた中央部を二分する南北建物の計画案は、寺小屋や医院（医療衛生関係）への方向へと大転換したものであろうとも考えられる。かなりの財を成した時期であろう伊助（53 歳）の期待が、姻戚の三代目格弥（64 歳）、四代目格弥（格斎 40 歳）、婿健斎（23 歳）、健斎の妻、伊助の妻、の登場人物と坪井民部（陰陽師）をして、村松家の将来を担い絵図面として整っていく断片とも見える。

ともあれ、この嘉永二年の風水図が語りかけてくるものは、幕末という時代の運命を背負った世代の困惑や挑戦として映りだされている。すべての商いの規模を拡大して大問屋になることや、黒船の影響でここにも一大プロジェクトが芽生えて来たのであろうか？既存の住まいを犠牲にしてまで生活ゾーンを南北にプラン変更をかけることは、まずもって考えにくい。歴史学者ではない私は、施主の思いのたけを語りつくせないほどの夢を描いてしまう。倒幕の機運が高まり、政治や経済も大変革を迫られる折、民の強かで、しなやかな生き方と受け止めたい。さてさて、長寿であった伊助さんの野望はどんなであったのか、この設計図を以って絶頂期の伊助の時代として観ることができる。また村松家構内で働く人々の姿は、男たちは外で馬を曳き、木を伐り、酒を造り、力仕事に、女たちは家で賄いを、活気に満ち、賑やかに動く様として滲み出て来るのである。

１－５　伊助のもう一つの仕事 「和宮下向助郷顛末」

旧櫛形町史に幕末の駿信往還での出来事に、次のような史実がある。

「幕末・明治・大正回顧八十年史　第二輯　東洋文化協会発行より」

==========

文久元酉年十月　日

和宮様御下向二付　御用留め

追而此触書早々相廻し、承知之旨別紙請書相添留ヨリ下諏訪江夫ヨリ廻宿先江可相返候以上。

和　宮　様

御下向之節、宿継人馬多入候間、左之村々中仙道下諏訪宿助郷申付候条、問屋方ヨリ相触次第人馬遅参不致、無滞差出相勤可申候。尤当時年季休役中之分も、今般御用二限リ是又可相勤もの也。

御印文久元酉年（1860）九月十四日　隠岐御印

御触書之趣拝見承知奉畏候。依之御請印形仕候。

文久元酉年九月　福田所左衛門当分御預所

甲州巨摩郡桃園村

名主　　伊　　助、

長百姓　与左衛門

以急廻状得御意候

今般和宮様御下向二付、其村々当宿江当分助郷被　仰付候二付、先達而・・・・　　・・・・

酉九月廿六日巳中刻

中仙道下諏訪宿

問屋　右左衛門

同　　司馬吉

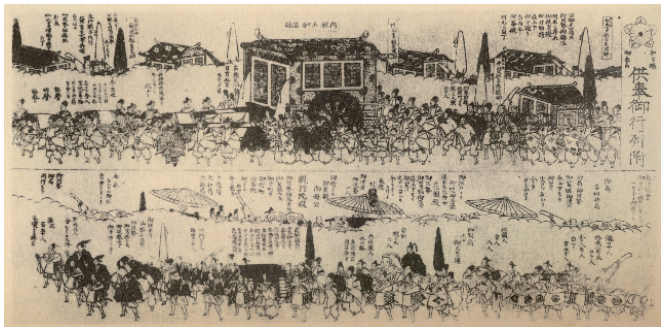
年寄　　佐吉

同　　末吉

同　　重次郎

==========

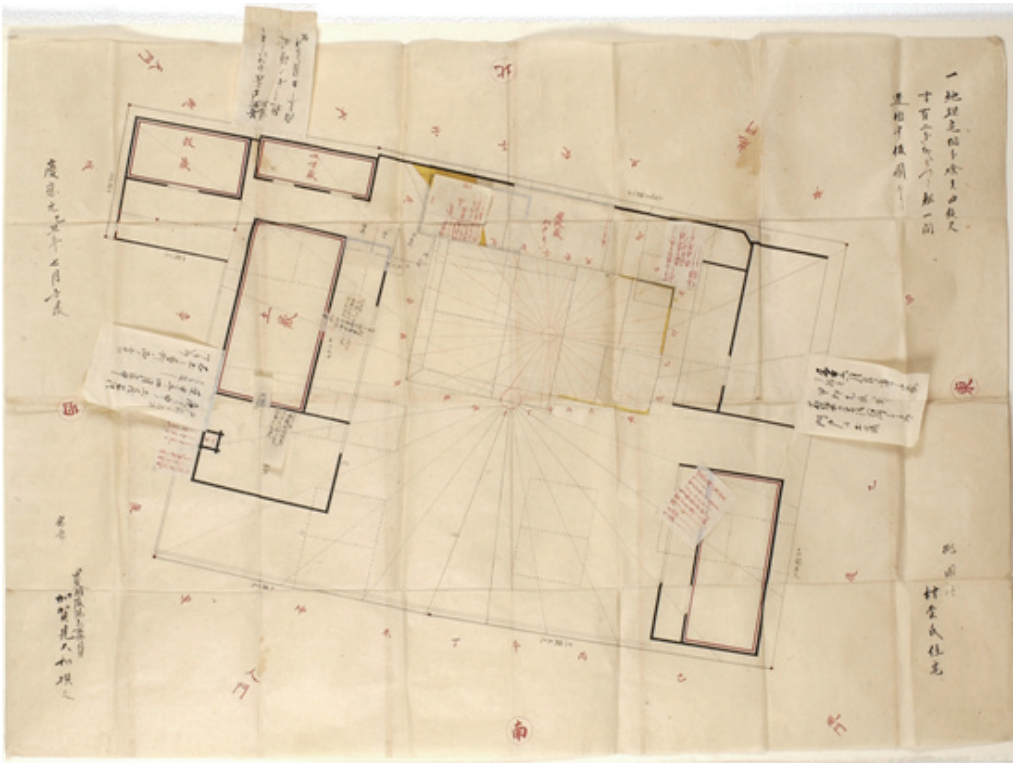
これらの文章は、助郷を出す桃園側と受ける下諏訪側のやり取りで、莫大な費用（石高、五百四拾八石七斗二升弐合）労力（高百石二付馬壱疋人足拾六人之触当）を必要とした事柄が記されている。
伊助の役割は桃園の代表として、これら助郷を取り仕切る大役を任されていたのである。駿信往還沿いの問屋でもあり、名主としての立場から必然的に廻ってきた助郷であった。



「幕末・明治・大正回顧八十年史　第二輯　東洋文化協会発行より」
この和宮のお輿入れは、幕府の緊迫した政局を乗り切るため、朝廷との関係を緩和し、幕府を中心とした公武合体政策を進めるためのものであった。天領（徳川領）であった甲州の民は、尊王攘夷派に付くべきか否かは、この時はいまだ見えない時代であった。

2　慶応年間（幕末）の村松家住宅

2－1　様相が変わっていた村松家住宅「（嘉永二年 1849 ～慶応元年 1865）の 16 年間」



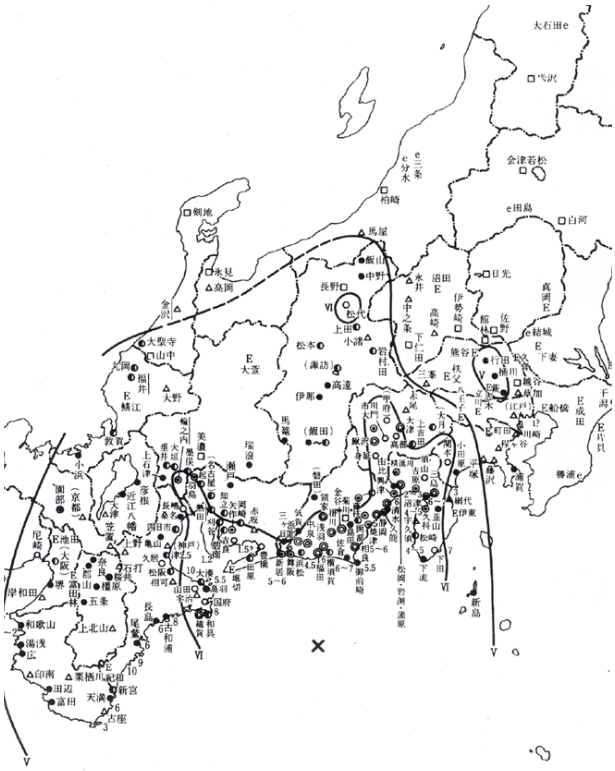
次に、慶応元乙牛年 1865 七月吉晨の古図（村松家所蔵）を見てみよう。

一地理宅相分検共曲鉄尺　寸有二分○○○して矩一間　造○中仮圖なり
應需　甲斐国陰陽家取締目付　加賀美大和撰之　とある。
村松家住宅「（嘉永二年 1849 ～慶応元年 1865）の 16 年間」の変化を敷地全体像から見てみよう。敷地測量には曲鉄尺一寸二分を一間とする縮尺で描かれているのは、嘉永の図と同じであるので、変化の様子がよく分かる。
また、あえて造○中の仮図と描かれているのは、住宅の改築計画案を検討しながら配置計画しているところであろう。
ここで嘉永図と変わらない建物は、中央の土蔵、この南の井戸のある土蔵、北の味噌蔵、穀蔵である。
大きく変わったことは酒造りの蔵や熟成の蔵、木納屋などが無くなり、駿信往還街道沿い南東の蔵が南に移動した。
このことから敷地奥の土地が無くなり、街道沿い間口が広がったことが分かる。これは敷地奥の機能よりも間口を広げたのである。
当時の江戸幕府の地租は街道沿いに接する間口に応じて付加される。この時期村松家の生業が造り酒屋などの生産を主にしてきた業態から、店蔵を主にした問屋、両替、質店等の流通、金融に変わっていったことがこの古図の比較（嘉永二年 1849 と慶応元年 1865）で分かる。
これはこの 16 年間に村松家「ニンベングチ」は経済的に大きな成長を遂げ、業態の変化を必然的に受け入れた結果であるか、また造り酒屋が成立しない「コメ、水や税」や、地震、台風などの天変地異、何らかの異変や変化が起きたかであろうか。ともあれ、村松伊助はこの 16 年間、時代の主人公であったことは他の資料（櫛形町史）でもはっきりしている。
この時期村松家では跡目継ぎというもう一つの大きな節目があった。勝家、北村家から両養子を向かえることによって、村松家の充実した資本をどう活かすか、時代の変わり目を生き抜く整えとして準備してきた経営者としての才覚としてみることもできる。

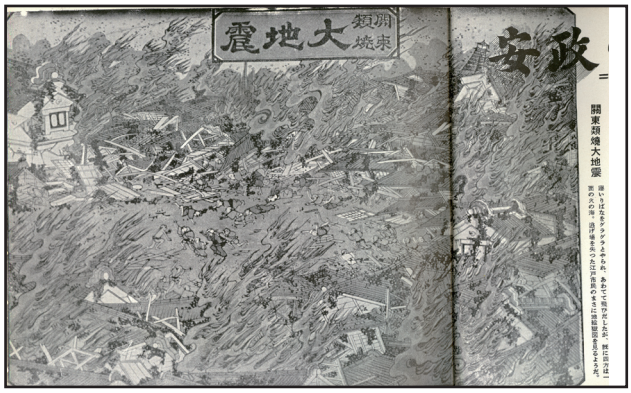
2－2 地震・大雨・火事・コロリ「天変地異と疫病」が生活や建築を変えた

つぎに、主屋の生活変化を空間 (間取り) の変化や構造（耐震性能）の変化として見てみよう。敷地中央空白部に実線で描かれている間取りを嘉永二年のものと比べると、奥座敷 8 畳床の間付から脇座敷 10 畳、奥座敷 10 畳が南北に、上農層にみる奥座敷の配置に間取りされている。これは村松家の格式を一段上げた生活の背景として、伊助さんと婿養子健斎さんとの調和から来る奥行きのある座敷の規模や格式（村役人としての役割＝脇陣）が必要になったとしてみることができる。また構造的な変化には、大きく目を引くものとして、大黒柱、恵比寿（小黒）柱の出現である。ケヤキの台カンナ仕上げである、一般柱は、トガ（栂）材（横浜の関口家・江戸中期や桂離宮と同じ）4 寸 5 分角の上物で出来ている。10 畳繋ぎの座敷は、縁や壁側の柱を一本づつ加えている。これは他の間の差し鴨居梁＋敷き桁梁による剛構造とした耐震構造に対抗可能で、しかも庭をもっと広く部屋に取り入れる書院造りの様式スタイルに変えた長押構造としたのである。（現在はそれに付書院を付加し、棹縁天井、透かし欄間などの江戸細工師たちの美技を施した完璧な書院造りとして完成している。）
また建築構造的に整理してみると、大黒柱と差物（差し鴨居）は機能的な生活の広がりを支える柱のスパンが広がり、差物の両（XY）方向からの仕口の交わる断面を確保するために大黒柱を太くしたのである。これらの

大黒柱＋差物構造は、耐震性能に優れた幕末期に見られるこの地域の特性と見ることができる。それを裏付ける資料として

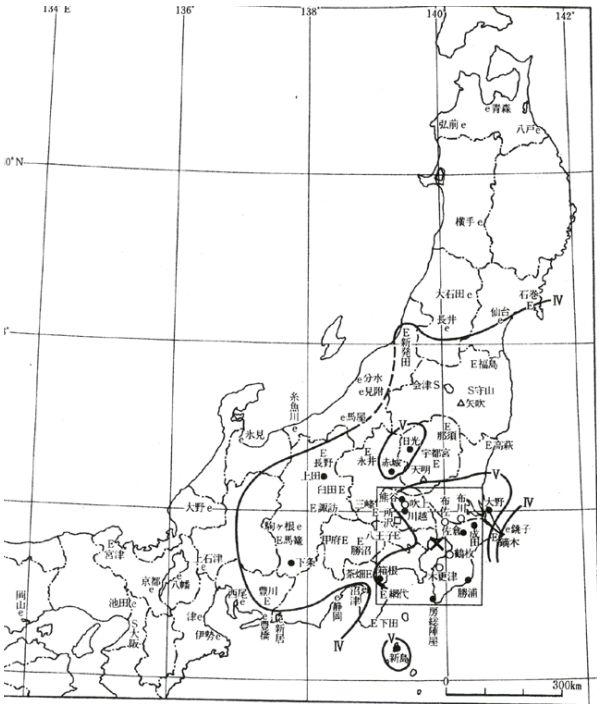


「安政東海地震　図 257-1 震度分布図より」



「関東類焼大地震」図（画報　近代百年史第一集より）寝入りはなをグラグラとやられ、あわてて飛び出したが、既に四方は一面の火の海。逃げ場を失った江戸市民のまさに地獄絵図を見るようだ。

安政東海地震（嘉永７＜安政１＞年 11 月４日五つ半過ぎ 1854・12・23）M8.4「甲府、鰍沢、市川大門で震度６」や江戸地震（安政２年 10 月２日夜四ッころ 1855・11・11 午後 10 時ころ）M7.0~7.1「江戸で震度５、甲府で震度４～５」、翌安政３年８月 25



「江戸地震安政２年　図２６２－１Ａ震度分布図より」

日 1856 に大暴風雨にみまわれて地震より大きな被害にあった , 万延１年 1860 に甲斐巨摩郡関口村密蔵寺本堂の潰る , などの史料（※日本被害地震総覧図「416-2001」）があり、ここ桃園村でも市川御役所宛に「桃園村風害届け」が安政三辰年八月廿七日に出されている、被害は一昨日廿五日夜稀成大風雨ニ而書面之家居風潰出来・・・と木綿蕎麦粟煙草一面吹例・・・等とあり、家や畑が台風で大被害を被った事実が櫛形町史にある。村松家でも嘉永２年からの建築物は特にこの安政の大地震や大暴風雨などで、長年の余震、土石流や風雨の影響などでかなり痛んでいたであろう。特にスパンの大きな酒蔵などは、これら地震（永く続いた余震）や大暴風雨（台風）など頻繁に起きた天変地異が重なる時期に解体整理され、街道沿いの長屋門併設の店蔵増改築や造り替えのために資材転用されたりしていった。また業態の変化と合い待って、時代の変革や天変地異から来る事柄を、どうしようもない事実として素直に受け入れざるをえなかったのではないかとも考えられる。自然の猛威はすべてを変える意思決定にも影響して来たのである。

このようなことから、主屋は、地震対策や暴風雨対策として、耐震用の大黒柱・差物構造に変えていくことの必然性があったし、併せて奥座敷の書院造の長押構造が大黒＋差物（剛構造＝木造ラーメン構造）と複合化されて、木造混構法の構造技術特性（知恵）として進歩していったことがわかる。ライフスタイル（生活の暮らしぶり）と地震や大風に強い建築構造がバランスの取れた幕末期の建築様式（スタイル）＝幕末大型民家として洗練されていったことが分かる。

因みに、村松家では大黒柱の脇に恵比寿柱（呼称）を設けている。一般的にはこの柱は小黒柱と呼ばれるが、村松家ではあえて恵比寿柱と呼んでいる。これは、商家では打ち出の小槌を持った大黒様と商売繁盛の神様の恵比寿様が同居していると思いたい。もう一つ呼び名の仮説が成り立つとしたら、先の江戸大地震に関係した恵比寿様を連想したい。ここに貴重な絵図がある。

「江戸大地震之絵図　貴重書　国立国会図書館蔵」では（神々が出雲に出払っている間（地震が起こったのが神無月のため）に、留守番をしていた恵比寿が、釣った鯛を肴に酒を飲んで酔っ払ってしまい、地震鯰を見張っていなかったため、その隙をついて地震鯰が暴れて安政江戸地震が起きたとされています。恵比寿は、今回暴れた地震鯰を引き連れ、地震を抑止する神様として有名な鹿島大明神に申し開きをしています。）という。浮世

に流されて気の緩んだ恵比寿様を象徴に、地震を起こす鯰（なまず）達を引き連れ、自ら戒める役割を負っているという。これは構造的に、大黒柱を支える脇役の恵比寿柱の意味と共に、商家の神様たちの役割を象徴していることでもあろう。この時代「（嘉永二年 1849 ～慶応元年 1865）の 16 年間」の経験を活かした間取りと空間構造とに醸成していった。

２－３　村松健斎（文政九丙戌年 1826 ～明治 18 年 1885）の登場「伊助から健斎へ」

（慶応元乙丑（きのとうし）年 1865 ～明治六癸酉（みずのとり）年 1873 太陽暦 5 月 5 日の村松家住宅）

もう一つの村松家の局面をこの絵図より図り知ることが可能であろう。

流行病（はやりやまい）妙薬（くすりの）奇験（ちかみち）　一勇斎（歌川）國芳画「画報　近代百年史より」

安政 5 年 1858 の夏長崎に入港したアメリカ軍艦ミシシッピーからもたらされたコレラは人々に大きな恐怖を与えた。予防薬のない当時として、その対策にいろいろな妙薬が発明された。図は芳香散や芥子泥などで九死に一生を得た人々が喜んでいるところ。

当時コロリという流行病で全国数十万人が亡くなったという。村松家に儒医・勝家三代目（格弥）の次男で婿養子に入った村松健斎は医者である。代々譲り受けた医者としての DNA は、これから以後村松家の生業となり、医家と商家を両立していくのである。また生活面では、健斎夫婦の高い教養と美意識が加わり、自ずと生活の変化によって、住みやすい住居へと変わっていくのは当然のことであった。よって、慶応元年 1865 の住宅部の間取り図は、その両方を満足するプランと見れば、嘉永二年の生産・商家としての間取りと比べて、医家健斎の村役人や教養人として、場を反映した整然とした完成度の高い建築を創りたかったと理解できる。

此の時慶応元年 1865 の時の村松家ファミリーはどんな年代構成になっていたのだろう、主人公健斎 39 歳、大姑伊助 70 歳（寛政八丙辰年 1796~明治八丙子年 1876）長男琢太郎 14 歳（4 代目格弥嘉永 4 年 1851~ 明治 40 年 1907）、次男正次郎 3 歳（文久 2 年 1862~ 大正 13 年 1924）である。さて、健斎さんとはどんな人だったのであろうか、息子たち格弥（長男琢太郎で後に勝家に養子として戻るが村松家で医業に励み、硯北日誌の著者）や正次郎（次男で実質的な村松家「村松商店ニンベングチ」を継承）は後世に資料を遺したが、健斎さんは建築のみにその偉業を見る他ない。当時の風俗写真として残っている場面は、健斎（父・医者）、格弥 (長男・医者で初代桃園学校の校長)、正次郎（勤皇の志士・谷干城を師事、政財界・実学の道を進む）等とイメージが重なり載せてみた。この写真では江戸の医者は薬箱を前に、襖のある畳部屋でゴザ敷き、屏風で患者を囲い、脇差刀を差している。患者の影には薬草刻みの薬研（やげん）らしきものもある。医者の様相がわかる。また、村松家住宅の 2 階はいつごろ増築されたか定かではないが、寺子屋や、書生たちの実学の場所（荒床にゴザ敷き）としての使われたような雰囲気が感ぜられ、この写真と重なるのである。

左上書生、左下寺子屋、右上歯医者、右下医者

明治初期頃の風俗写真「幕末・明治・大正回顧八十年史　第二輯　東洋文化協会発行より」

ところで、甲斐國陰陽家取締目付・加賀美大和による風水図は、慶応元乙丑年七月吉日 1865 とあり、造営した主屋の棟札には同年十月吉日とある。このことから、古図（風水図）を画いた後三ヶ月で上棟まで持っていくことになることを考えると、途中の迷いや、決断の根拠を確かめながら、かなりのスピードで進めていったことがわかる。健斎さん（文政九丙戌年 1826 ～明治 18 年 1885）39 歳の男盛りの歳であるが、厄年を二年後に控え、相当なる準備と計画性をもって、まとめていったことがこの古図（風水図）を見てよくわかる。

「村松家主屋棟札慶応元乙丑年十月吉日 1865・10 月
村松健斎造立
奉勤請天神地祇八百神　棟梁
下田原村若林駕蔵源治知　脇棟梁　他」

この古図（風水図）を読み込んでいこう。建設中であろう主屋は、一刻も早く立て替えざるを得ない時間的な制限がこの時にあったのであろうか、今現存している主屋の位置に相当するのでこの時は確かに建設中か、予定平面図（プラン）が決定されていたことは定かである。赤字で小さな字で書かれ、小紙に貼り付けてあるものから読んでいくと。

①主屋の北東の水盤場は同年 3 月、6 月に吉地に小修法ヲ行い、　流し場を壊す。

②主屋北西の浴室、雪隠の場は八尺二間で丙寅年 1866 つまり　翌年か八か年後の酉年 1873 によし。

③主屋西南の井戸場の建物は、丙寅年 1866 年に取壊し四、六、　十一月よし。

④主屋東南の場所を、此処の壊し當（あたり）、丙寅年 1866 として吉、　地の中央より辰の方と而して小凶なり、取去る家の中央より　巽の方に當り取壊し、七、十一月よし。

とある。

よって駿信往還沿い南東の長屋門の蔵は主屋を建てた翌年慶応二丙寅 1866 この年に解体されたことが分かった。これら①～④は慶応元乙丑年七月吉日 1865 ～翌年慶応二丙寅 1866 十一月までの間に取壊された。が、②の主屋北西の浴室、雪隠の場は、その機能上８年後の西年 1873 になった可能性がある。これはすべての立替中（商家蔵完成まで明治６年太陽暦５月５日 1873）必需であったからであろう。

つぎに、太字の大きな黒字の文を読もう。

（イ）敷地西の大きな土蔵に関して、戸前口附直し、庚ヨリ申土蔵取壊し、来申年四月 1872「明治５年」○中とし○し、石土ころ屑所ハ西の方江○○・・

よって、嘉永二年 1849 以前よりあったこの蔵は明治６年商家蔵造営前に無くなる。

（ロ）敷地西北の穀蔵、味噌蔵等に関して、此の所土蔵取壊し○○、○物、乾ヨリ壬ノ領江掛り、酉年五月「明治６年 1873」○中　宜（よろし）。

これは商家蔵上棟明治６年５月５日後に天門を空け、解体無くなるのである。

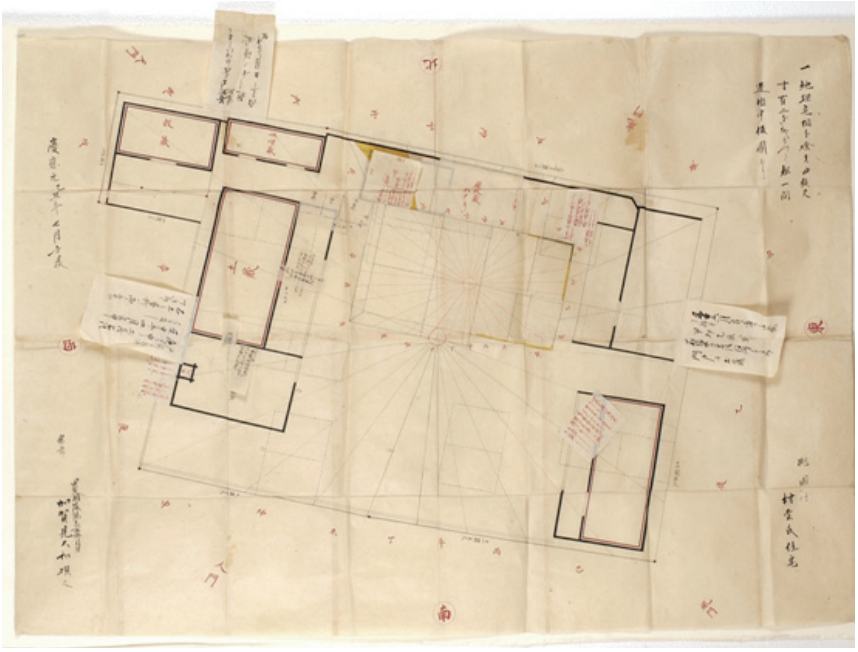
（ハ）東の店蔵に関して、来申六月「明治５年 1872」○壊○○掛り、取壊し？　甲夘乙辰ノ江掛り、　右陽亦○○○同時として○如し？　門戸併せ土蔵

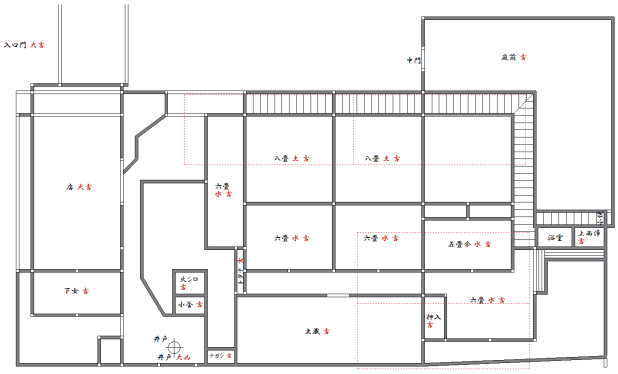
このことで、商家蔵造営棟札―明治６年５月５日 1873 前に解体が完了していたことが分かった。

商家蔵造営棟札

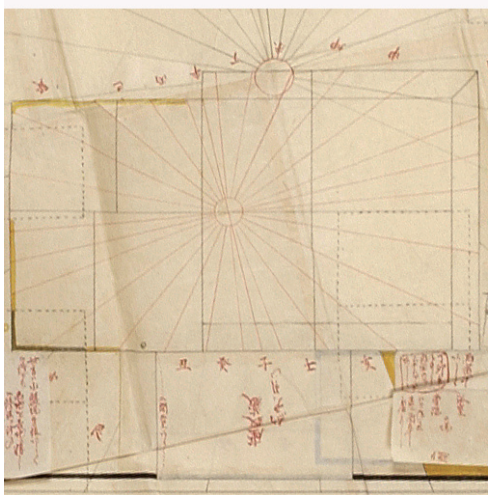
欽精　天界面足尊、天思兼尊、天兒屋根尊　明治６年太陽暦５月５日 1873

つまり慶応元乙丑年７月 1865 ～明治６癸酉年陽暦５月５日 1873 の８年間、村松健斎（39 歳～ 47 歳まで）は主屋の新築に伴い、各蔵を整理し、駿信往還沿いの商家蔵新築まで、普請続きの日々であったことになる。健斎はこの古図（風水図）に則り、社会の変化をのりきるため、資本の整備と業態の変革に果敢に挑戦していった。新しい主屋（慶応元年 1865）や商家蔵（明治６年５月５日 1872）の新築に費やした８年間の資本やエネルギーは莫大なものであったであろう。また長寿であった大姑・伊助は、子孫のためにかけられたすべてのことを了解し、これを看取り、翌々年明治８年 1876 に 79 歳の生涯を閉じることになったのであった。ここに桃園・村松家の世代交代は、嘉永二年 1849 ～明治６年 1872 の 23 年間を費やして、時代の大変革（幕末～明治維新）の真っ只中において、新世代へと業態を替えて、新たに受け継がれたのであった。黒船・地震・大暴風雨・火事・コロリ（疫病コレラ）と庶民の暮らしを揺るがした時を経て、山梨県巨摩郡西郡筋もいよいよ新しい時代の幕開けの準備に向かっていくのであった。

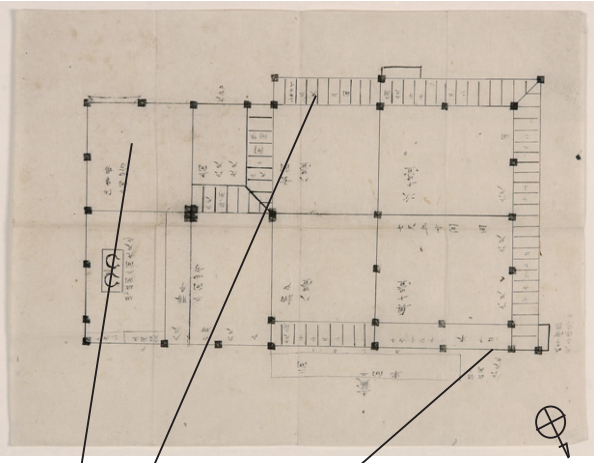




嘉永二年 1849 以前の住宅と商家蔵間取り図（村松家所蔵）



慶応元年 1865 の風水図にある実線引きの間取りを考案途中の図拡大（村松家所蔵）



慶応元年 1865 の住宅部の間取り（単品の間取り図として存在している図面「村松家収蔵品」）

２－４　村松家住宅・主屋は平屋建茅葺であった。

（慶応元 乙丑（きのとうし）年 1865 ～明治六 癸酉（みずのとり）年 1873 太陽暦 5 月 5 日までの 8 年間）

前項では現存する村松家住宅にもっとも近い建築に変えていった平面計画を追ってみた。その頃の主屋は今改修前（平成 15 年度前）にあった建築との違い、類似点や疑問点を列記してみよう。

㋐　奥座敷 10 畳はアカリトコ（内縁部分）とあり、この時期に付け書院は無い。

㋑　玄関八畳はシキタイ（式台）三尺二間とあり、正式な玄関として、ここに駕籠をつけた。

（※ 式台（しきだい）は名主、庄屋、本陣などの格式の高い家に設置された）

㋒　大黒柱と恵比寿柱の間は 9 尺で同じであるが、寄付の間は土間六尺九尺であり、3 尺板の間付や大戸口があった。（後に大戸口を式台に変え、付け繋げ一段と格式を上げていった。）

㋓　土間部は仕事場と書かれている。此の部は土間であったか？　医業、商家なので土間ではない低い板敷きの可能性もある。

㋔　勝手二間四方は 6 尺の棚と北に抜ける戸があった。

㋕　竈（かまど）(へっつい)がある。(一通り四～五間の煙抜き欄間の痕跡はあった。)

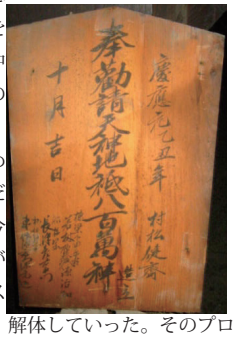
㋖　竈、北の東はナガシであり、その西は土間三尺六尺、戸とあり、土間と明記したことによると、竈とナガシの部分は低い板敷きの可能性がある。

㋗　納戸八畳間は箱階段がない。北三尺は内縁で、土蔵（三間半、二間の間はイタシキとある。）はつながって使用された。

㋘　商家蔵と主屋との連続性は、この慶応元年古図の計画では、壁で仕切られている。竈のある一通り三～四間は秣（まぐさ）の痕跡があり、外部の通路に出る入り口であったか。

㋙　嘉永二年古図や慶応元年古図にある敷地南西にある土蔵内の井水は、現内庭内の外にあった井戸として、代々語り伝えられてきた位置である（内縁南東柱から西に六間半、南に三間）。今ある内庭内の石積み石の廃井戸はその後のものである。

㋚　上記㋙により、西の土蔵類を解体（慶応元年～明治六年）し、嘉永二年以前の前庭を復活し、南に三間半、西に六間半、一間の中門のあるひと回り大きな前庭を造り、現在の状況につながってくるのではないか。



㋛　敷地内建物を全て新しく造りかえるために、村松家の家族は何処に生活していたのだろうか？当然、主屋を新築するためには、今ある土蔵などを仮の住まいとして使用しながら新築して行き、新築された主屋での生活スタイルを実現するためにその他の建物を改築、解体していった。そのプロセスが慶応元年の古図に造り替えの時間軸としてすべて画かれていたのであった。

㋜　新しい主屋 (慶応元年 1872) は、酒蔵前の土蔵内の井水の位置を機軸にし、建物南西の角即ち座敷内縁柱は、嘉永二年 1849 古図より南に 10 尺、西に 10 尺移動して配置されたことが分かった。

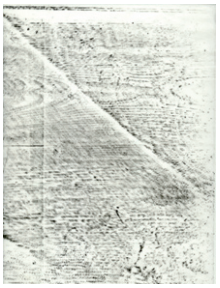
㋙において現内庭の外にあった井水は、後に埋められて、内庭の中の井戸（石積）にとって変わられることになる。

㋝　このように、平面図から分析してみると慶応元年時の主屋は一棟で完結して、裏の座敷蔵、雪隠、湯殿などへの渡りがどのようにつながっていたかは、類推するに渡り廊下などでつながっていたと見るべきであろう。

㋞　この時代の小屋裏はどのように使われていたのであろうか、下図拓本等を参照してみよう、大黒柱の棟札板（慶応元年 1865）には板小曳きの曳き目がある。オガ（ガガリ）による板の小曳き跡がはっきりとあり、その同じオガ（ガガリ）による曳き目の板が小屋裏床板（１階の座敷を除く天井板の裏面）に使用されている。このことで、慶応元年時は、現在のような二階の使われ方でなく、小屋裏の荒床のままの使い方であったことがわかる。

また床板は他にチョウナナグリの床板（天井の表は鉋掛け仕上げ）もあり、これはそれ以前の嘉永二年 1849 の建物の使用に思われる。

慶応元年 1865 主屋２階大黒柱の棟札拓本撮り。



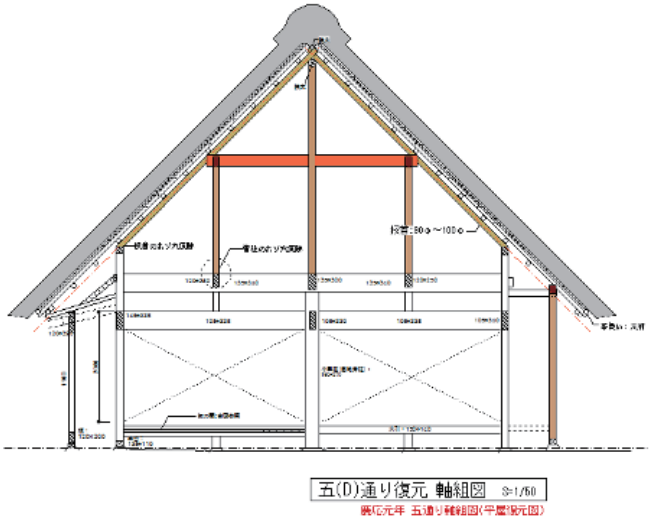
主屋２階弐の弐～壱間床板拓本撮り　　床板曳き目拓本（慶応元年 1865）

床板チョウナ仕上げ拓本（嘉永二年 1849）

㋟　小屋裏（現在２階）に上がってみると南、北の桁（ナグリ仕上げ）に継ぎ足し柱で現２階として増築されている。このことは、素材の仕上げ方の違い（鉋掛けとナグリ）や組み方の構法（京呂小屋組に又首（さす）丸太と方杖トラス方式）の違いとして判別できる。又首（さす）ホゾ痕跡（南北の桁）、小屋束痕跡（床板の切り込み跡）があったため、以前は平屋造（小屋裏使用）萱葺きであったことがわかる。

又首ホゾ痕跡（南北の桁）　主屋２階南桁部

小屋束痕跡（床板の切り込み跡）主屋２階五の二部



ここで注目したいのが、平屋造りであったことから部材、素材の面からもう一つの視点で
観て見よう。

１－軒の処理

現在の村松家は南正面、西座敷周りが二重の化粧垂木（部分的に出桁による）処理がされてる。

修復前の村松家

この二重化粧ダルキの軒はどこから来るのであろうか、軒の出の長さに注目してみよう。最先端の化粧垂木が無かったとして、この部分が茅葺であったと考えてみると、セガイ造りになる。

※セガイ造りは、軒端に桁を張り出して天井を張り、屋根下地を見えないようにした形式を総称している、江戸初期に京都の町家から発生したといわれている。やがて関東地方に伝わり山梨にも影響を与え、村役人以上の家柄だけに許され、一般民家では明治時代に入ってから模倣されるようになった。「山梨の草葺民家（坂本高雄著）ヨリ」

「山梨の草葺民家（坂本高雄著）ヨリ・山中湖村平野」

ここで「五通り復元軸組み図」を見ていただきたい、平屋で茅葺であった時の軒の処理として、セガイ造りの茅葺であった。後に瓦葺に直して二重の化粧垂木を施して、軒の出を揃えたことが分かる。この次期がいつになるかは、定かではない。家族の言い伝えでは、昔大火事があり、桃園の宿の北で火事が止まったということで、瓦に葺き替えたことによる。または２階建てにした時期に二重の化粧垂木にしたのであろう。現玄関に上部の出桁によるセガイ造りの名残は、構造的に受け桁が断面不足により吊方杖や金物（９ミリ角鍛金鎹）で吊りこんでいた。又後にそれを補完するために柱も立てていた。これはかつて、茅葺のスヤ造り（下写真）で見られるように、軒を上部の竹垂木などのはね出し（片持ち構造）で持っていたのであろう。

「山梨の草葺民家（坂本高雄著）ヨリ・長坂町大井ヶ森のスヤ造り」

玄関上部吊木方杖（柱より吊り込む）

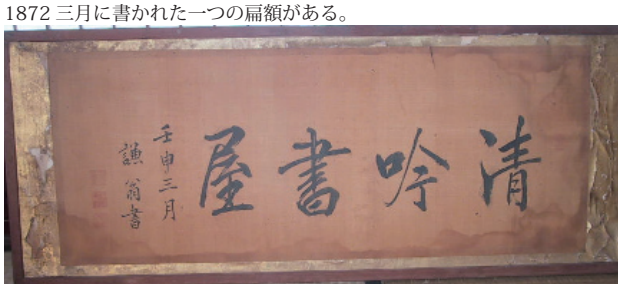
玄関上部吊金物（9ミリ角鍛金鎹）

このように、軒処理の過程で構造的な補強の履歴によっても茅葺構造の平屋であったことが証明できるのである。

３　清吟書屋「健斎の雅号・村松家の精神的な礎」

３－１村松健斎の清吟書屋はどのように使われていったのであろうか？

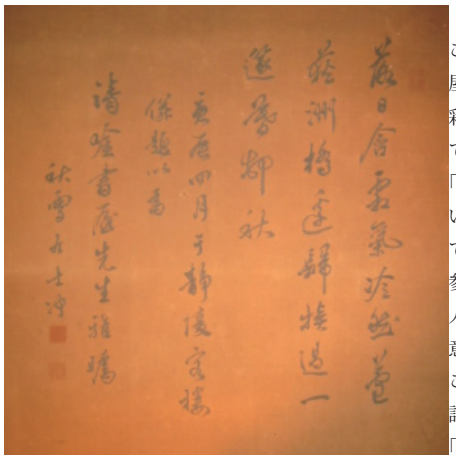
村松健斎は教養の高い医者である。村松家所蔵品の中に明治５壬申（みずのえさる）年1872三月に書かれた一つの扁額がある。



この雅号は、健斎自記筆の書で、清らかに声を出して吟ずるための書庫がある建築という意と、教育や実務、教養の館としたいとの意も後々明らかになる。

また、脇床違い棚金襖には、紅白牡丹、燕、蝶の霞舟漁隠の書画がある。これも壬申とあるゆえ明治５年壬　申（みずのえ　さる）年1872に清吟書屋と同年に描かれたものである。

脇座敷には襖絵の水墨画には「庚辰（かのえたつ）明治13年1880四月清吟書屋先生（健斎）　秋雪」とある。ここでいう先生は、医者としての先生だけではないだろう。漢詩サロンとして吟じてみせる先生や、私塾・寺子屋の先生であるように思いたい。通俗な言い方になるかも知れないことをお断りして、桃園地域の文化の拠点として、使われていったように思うのは私だけだろうか。



このように、清吟書屋は漢詩と水墨画や彩豊かな襖絵で設（しつら）えていた。この建築は「芸術家と何をかしたい精神」とが融合していく空間であった。参加した芸術家が主人である健斎さんを意識して画いていることがそのことを物語っている。

「清吟書屋」正座敷（10畳）・脇座敷（10畳）の中仕切り襖（水墨画）には春の水・夏の雲・秋の月・冬の嶺など、この地域の原風景の情景を読み込んだ漢詩に引用した引き手が豊かさもの遺っている。

また「清吟主人」の呼び名は、勝格弥の日記にもしばしば登場する。ここでいう主人は私塾・寺子屋では主人とは言わない。事柄や催し物、活動の場の中心人物としての主人であろう。「清吟主人」と呼ばれるくらい日常でも人々の想いを漢詩や新しい教育に託して、この場を使っていたのであろう。この時代国内政策としては、大政奉還後、元号を明治（1868）に改め、明治２年（1869）に遷都して江戸城西の丸御殿を皇居とした。明治４年(1871)、廃藩置県を断行し、甲斐、甲州から山梨県となった。戸籍の作成、徴兵制の実施、紙幣発行による財政の掌握、府県制・学制の実施、官庁街の建設などを進めていった。ここ桃園村松家でも、旧幕府体制下の代官や村役人が意味を成さない時代に変わっていく過程の中で、地域秩序維持のための陣屋機能を有する座敷として使われてきた家の精神的な中心は、士族の管理下の座敷の使われ方から、「清吟書屋」と銘うって「清吟主人」そのものが中心となって使い込んでいくという空間意識の変化（官から私へ）が読み取れるのである。ここで面白いのは、漢詩サロン的な活動はもちろん高い教養が無ければできないことであるが、どのような人々が集まってきたのであろうか？この地域の住民や患者、出入りの商人達、

または旧士族など様々であったに違いない。そのような人々が集い吟を以って共有しているサロンの状態は、もう一つの共有した何か・・・すなわち人々が集いコミュニケートしていく公共の芽生えとしてみることが出来る。「清吟書屋」は、健斎さんの実兄４代勝格弥（勝格斎 1820~1876）や実の長男５代勝格弥 (1851~1907)、次男村松正次郎 (文久２年 (1862)~大正１３年 (1924))、孫６代勝格弥（勝謹弥 1856~1893）等の教養人、また縁戚関係にある北村家、大久保家、若尾家などの面々や幅の広い家族のネットワークをベースに集まり育っていったのである。

３－２　村松健斎モダニズムに挑戦・「アーチ枠八窓の２階建て」に

３－２－１　主屋を２階建てにした目的は？

村松家の慶応元年から始まる大普請は、明治６年に商家蔵の完成を以って一段落するかにみえた。村松家健斎さんは明治六年 1873 御歳 47 歳である。此の時村松家ファミリーはどんな年代構成になっていたのだろう、大姑伊助 78 歳（寛政八丙辰年 1796~ 明治八丙子年 1876）長男琢太郎 22 歳（4 代目格弥嘉永 4 年 1851~ 明治 40 年 1907）、次男正次郎 11 歳（文久 2 年 1862~ 大正 13 年 1924）である。

ここで勝家の養子となる長男琢太郎（５代目勝格弥）は、この後医業と高い教養を身につけ、「臨床応用・硯北日誌（上）」（勝格弥）を書き記すなかに清吟書屋について、健斎さん（父）そのものを指す言い方に変わっていく。この時代の山梨は大小切騒動により大きく羅針盤が振れた時代であった。ここ原七郷でも明治５壬申年 1872　8 月 16 日大小切嘆願県に出している。原七郷組合村々として甲州巨摩郡西野村外八ヶ村の中に桃園村も含まれていた。あえて、甲州と古い国名を言ったことで、年貢の納め方が変わったことの戸惑いや不平が一挙に吹き出た時であった。翌月 9 月には旧貨、新貨交換割合が定められて、デノミが実施され、生活面での変革がまた打ち寄せたのであった。これらを境に県令が藤村紫郎にかわり、殖産振興と教育に目が注がれていった。村松家でのこれらの受け止め方は勝格弥「長男琢太郎（５代目勝格弥）」をとおして、儒学に深くまた詩文をよくし熱心に子弟を教え、明治６年 (1873) 蓮経寺を仮用し創設された桃園学校（後の桃園尋常小学校）では、初代校長を勤めた。『臨床応用 硯北日誌（上）』には、明治８年 (1875) から１６年 (1883) までの貴重な日記が記されている。

また、健斎さんに影響を及ぼした健斎さんの兄で勝家長男５代目勝格弥（格斎文政二己卯年 1819 ～明治九丙子年 1876）はこのとき 54 歳である。縁戚筋に当たる若尾逸平は巨摩郡在家塚村の百姓若尾林右衛門の次男として生まれ(文政３年(1820)、大正２年 1913 ９月７日、９３歳で他界）は 53 歳である。健斎さんはこの身近な６歳上の兄世代に大きく影響を受けたことは間違いあるまい。医業や教養の習得は兄（４代目格弥）や実父（三代目勝格弥〕からであろう。実業に関しては、義父・村松伊助（先代当主）もちろんのこと、村松家の名主・村役人・商家としての交流に一番近いと思われる若尾逸平をはずすわけにはいかない。若尾逸平はこのときすでに、横浜に芝屋清五郎（横浜新開地弁天町に開業した甲州人）の店を宿に外国人と商売をし、得た資金で甲府山田町三丁目に若尾商店本店を置き、ここに６人取りの製糸機械１３台を設置、さらに愛宕町に８人取りを１２台備えて（後には荒川端に千人取りの工場を開くまでになる）製糸マニュファクチュアー（文久二年 1862）を始めていた。また名主格（明治元年 1868）を受け、後の土地永代売買解禁・壬申地券の公布（明治５年 1872）などの土地政策を予見したかのようである。その間、若尾は官金為替取り扱い（明治４年 1871）を受け、金融の基盤も整備していた。それとは反して明治六年には、大区小区制実施や大小切騒動が起き、若尾本店が焼き打ちされている。これを契機に若尾は商売一筋の人生から、社会事業や政治に関心を抱くようになっていく。このとき村松家当主健斎は商家蔵（明治５年 1872）を新築していた。

今事業で、曳き屋移設するまでの商家蔵西壁には、主屋土間上部の屋根部跡が遺っていた（移設後その痕跡を漆喰壁に線で遺す)。この痕跡が物語るものは、主屋の平面プランが慶応元年の平面（下屋増築前）の延長線上に位置していたことである。屋根勾配は主屋平屋萱葺きの勾配とは違う。また屋根は瓦葺きであったわけであるが、軸通り一致が物語ることとして、土間上部の屋根部分が２階（今事業改修前の位置）になって、裏の下屋の屋根勾配と一致してくることを合わせて検討してみると、主屋が２階に増築なった時と関係してくるのは明らかである。また、村松家家族の語り伝えとして、主屋座敷広縁側長押の未取り付けなのは、その工事の途中に健斎さんが逝去されたことによると言われている。その後の息子正次郎は普請には関わりが無く、また社会の変動期にその基盤の維持に奔走し、次代の夢や希望を地元の桃園に求めたり、普請の余裕を持ちえず、実業に精をだしていたといわれている（祖父正次郎の記憶を孫の並木昭子語る)。このようなことから、健斎さんが２階増築を行ったことは確かになってきた。２階部分の主材料はすべて鉋(かんな)掛けがしてある。部分的にはそれ以前の小屋構造材（チョウナナグリ）を削っていることも合わせて考慮してみると、２階を単なる仕事場（葉タバコの乾燥や漢方用の甘草用）ではなく、何かに利用する目的があり、化粧仕上げでしたことが読み取れる。

さて、ならばどのような目的で八窓のファサードを付けたモダンなデザインを試みたのであろうか。また、越屋根や両切妻屋切部上げ下げ窓は、葉タバコの乾燥、漢方用の甘草用、養蚕のためのであろうが、村松家ではここで繭の生産は無かったといわれているが、正次郎は養蚕業とされる記録もあることから、床暖房の施設が物語るように当時としては、最新の温育栽培の実験を試みたのであろうか、がそのダクトジョイント内部には煤けた痕跡が無い。別の視点で見てみよう、実業面では、床暖房を施したのは先の温暖育で早生の出荷で値の高い投機的な実験を試みたかったのでは？

一方医学の面では、村松家の医者としての才覚と養蚕を結びつけると、人間の病だけでなく、蚕の病気も治していったことは当然考える。時を同じくして世界では、(『1865 年パスツールは養蚕業の救済にとりかかった。その頃、微粒子病と呼ばれる病気により、たくさんのカイコが死んでいた。途中、1867 年には脳卒中で倒れ、左半身不随になったが、数年にわたる調査の結果、病気の原因はカイコの卵への細菌の感染であることを証明し、稚蚕飼育所からこの細菌を駆除することで、微粒子病を防げることを示した。』その後、『明治 19 年に蚕業講習所として東京、西ヶ原に設置された。のちに京都にも講習所が設置された。この当時の主要な研究業績は、ルイ・パストゥールの研究を基礎にした微粒子病の防止法の確立であった。また、これらの施設が蚕業教育や技術普及に果たした役割も大きい。』養蚕技術の変遷史より転載）の記述がある。また、大正期に健斎の孫・重雄が自らの大同洋行出版局にて「パスツールの和訳本」を出版していることや、現に今でも蚕の病気は松葉を焚くことでその細菌を殺すといわれてきたことなどを考えると、健斎＋琢太郎・五代勝格弥（健斎の長子）＋謹爾（4 代格弥の嗣子、健斎の弟、東京帝国大学医科大学卒明治 22 年卒、安政三年 1856~ 明治 25 年 1893）三代は、本業の医業・衛生とを実業の養蚕に応用した「温育と蚕のウイルスフリー」を考えたゆえ、その痕跡として残っているとの試論も成り立つのではないだろうか。

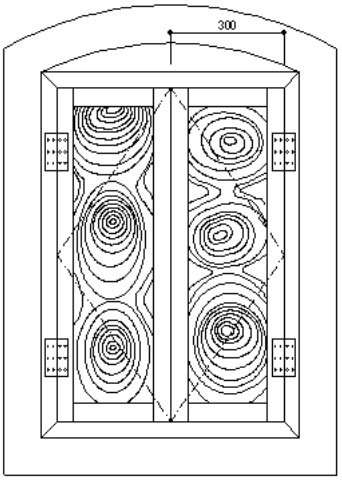
その他、主屋の２階増築に関しての時間的、意匠的問題点は幾つかあるので整理してみよう。

３－２－２　素材、形態・意匠的には擬洋風建築（藤村式）以前の居留地住宅モデルか。

[A] －アーチ枠八窓はケヤキの木目描きをペイントで施す手の混んだ意匠表現をしている（これは国重要文化財・旧山梨郡役所明治 18 年・重要文化財『明治村』にも見られる）。

国の十郎文化財旧東山梨郡役所「明治村」

[B] －アーチ枠西妻側開き戸は、意匠的にパネルシャッター「ドアー」としての使用目的（明治８年建立、国登録有形文化財・旧富岡敬明家住宅２階バルコニー）の扉に類似（擬洋風建築「藤村式建築」といわれる前の居留地住宅の影響として現存する住宅の中でも一、二番に古い洋風住宅スタイル）するものと、年代的には少し後になるが国重要文化財・旧東山梨郡役所『明治村』バルコニーのドアーにも類似している。

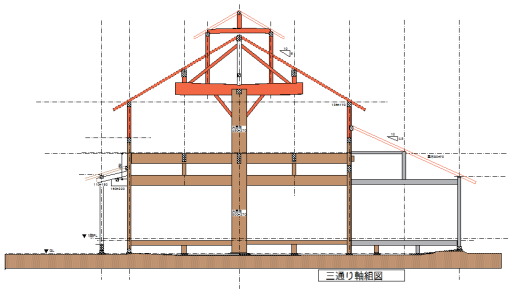


村松家主屋２階パネルシャッター (修復前)

[C] － ２階床材は旧小屋裏床板（１階天井板の裏面上部はナグリ仕上げとオガ、ガガリ曳きを併せ持つ）の素材の統一性の無い張り方で、嘉永時代の素材の使いまわしの材もある一段低い床と、座敷上の一段高い床はすべて鉋仕上げの床板であり教壇か舞台『清吟書屋』として見える。

３－２－３　葉タバコの乾燥や漢方用の甘草用、養蚕に関係するものは？

①越屋根の垂木部は他の垂木と同材であり、後に改築された形跡は見られない（「財」文建協・中内康雄課長分析）が、通風を主としている。



②２階床に１階天井を抜く刳り貫き引き戸穴「暖気の上昇や薫煙の通り道のため」が１階４部屋の上部にある。
③中の間の箱階段上部の天井引き戸と化粧根太材の素材一致は当然として２階を座敷より管理できる空間として意識的に造った。
④釜戸煙突の設置跡やその煙突周りの２階床部で１階板簀子天井の造りは２階にも温気が行くようにと、板簀子天井に泥を塗りこみ防火的な古い形式の天井仕様とした。

３－２－４　１階床下暖房装置、２階の床引き戸の痕跡は何を物語るのだろうか？

貴人口８畳―炉の 痕 跡

貴人口８畳―炉、縁の下痕跡

村松家主屋１階床下には、暖房施設の痕跡がある。その場所は土間、旧台所、茶の間、女中部屋、内玄関（寄付き）、神棚の間（居間）を除き存在する。そのうち、奥座敷は炬燵（こたつ）の炉跡があるのみである。他の部屋では、脇座敷（瑠璃の間）貴人口８畳、納戸寝室８畳、仏間８畳、には炉縁が回してあり（留枠納まり）蓋がある。その炉は土壁（竹小舞）で塗りこめられていて、それぞれが円形の横ダクト（土管などを番線で吊り上げる）で結ばれていた。特に貴人口には今でも保存状態の良い痕跡がある。
これらは、奥座敷は荒床のままであったので、畳が常時敷かれていたが、脇座敷（瑠璃の間）や貴人口などは床板が鉋仕上げをしてあるため、板敷きのまま使われていた。これは次の３点に絞られるがどうだろうか？古い順に使われ方の推測をしてみよう。

１－この建物の棟札にある明治６年頃健斎さんは医師であった。後の長男格弥さんは勝家に後継ぎで行きつつ、この清吟書屋を語り、健斎さんの手伝いをしていた。明治 13 年ころまでが一期として考えられる。このときにこの暖房設備が施されていたとすると、医者の仕事と患者の関係と思われる。よって、暖をとることか、煙を使用した治療術などが」考えられる。

２－次男で跡継ぎの正次郎の時代では、明治 27 年には養蚕実業家と記録（山梨繁昌明細記）に載っていることから、養蚕用の暖房施設（温暖飼育による実験装置か）で、煙（松の葉燻し）により蚕が病気にかからないようにした燻蒸用の装置としたか。

３－第二次大戦（昭和 16 ～ 20 年）前疎開による暖房設備。

貴人口８畳―北側、炉土壁 _、配管吊金物

以上のように時代と使われ方には３点考えられるが、貴人口に炉が切ってある

ことは、入り口の使われ方としては不自然極まりない。正次郎はほとんど養蚕を自宅ではしなかったと言い伝えられている。仮住まいの疎開の人々（7 世帯暮らしていた）に改めてこのような設備を施す余裕があったとは思われない。もしもをもう少し考えてみよう、貴人口は様式として造られたが、医者である健斎、格弥親子の医業によって、部屋の使われ方が患者や自らの暖房施設として設置された可能性が大きいのではないだろうか。また、正次郎の養蚕実験棟（越屋根の設置もある）としての可能性もあるかもしれないが、

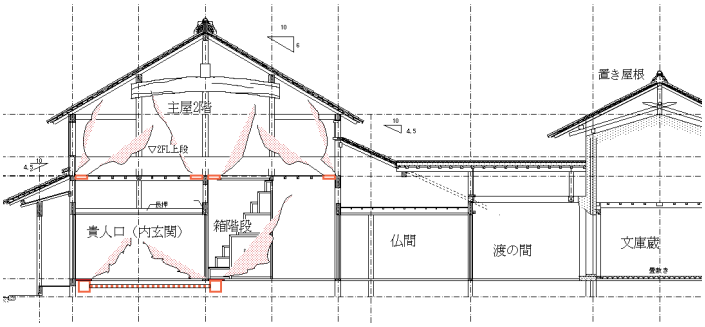
2 階北壁際引き戸、下部は寝室納戸（箱階段）の間

家の人が誰もしない養蚕家業はきいたことがないという。でも 2 階床にも 1 階天井部に引き戸穴があることを類推すると養蚕の施設としても考えられるのが普通であろう、が脇座敷上部にはその引き戸はない。実用に共した視点では上記分析である。

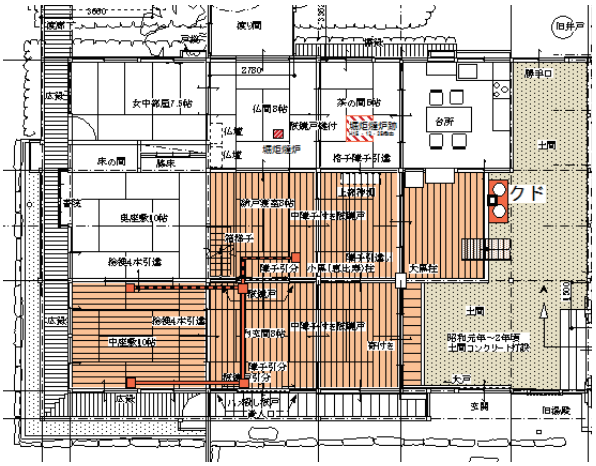
次に清吟書屋（健斎）を純粋に捉えてみた場合どうだろうか、1 階は診療に使われて、2 階に人寄りをして漢詩を吟ずるためのアメニティー設備としての立体的な暖房設備に使われたとは思い過ぎであろうか？

2 階小黒柱廻り 4 箇所煙抜き

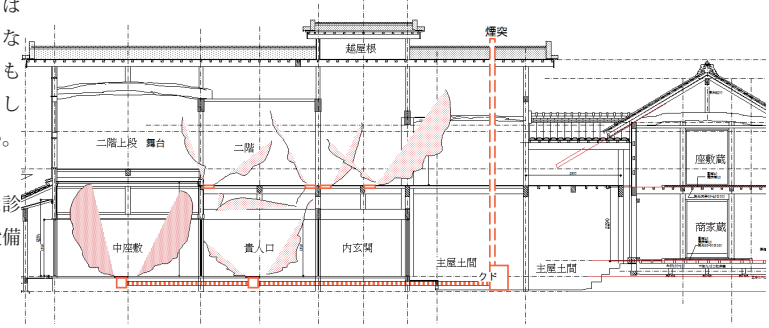
2 階段差ユア床鉋仕上げ舞台



床下暖房ダクト、炉、開口部位置

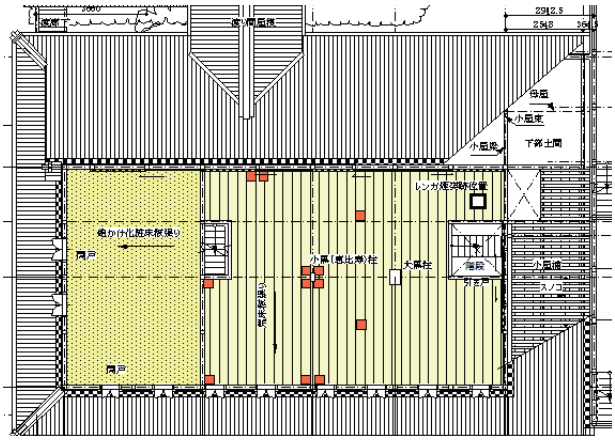


1 階床下暖房ダクト、炉位置



床下暖房ダクト、炉、開口部位置

アーチ枠の窓や、ガラスの障子類など二重に窓をとる等、養蚕の施設だけでは考えられない設備がしてあることや、座敷上部（2 階）は床板が鉋仕上げであり 50 センチ上がりの舞台のような空間を呈している、音の響きもとても良い。ここまでの飛躍推理は許されるか否かを判断することは私には出来ない。しかし、この主屋の持っている豊かな空間構成は、人々を 130 年前の村松家のゆとりや時代を超えた観照へ誘うことは確かである。当時流行り病の患者の医療のための施設か？漢詩を吟ずるエンターテイメント（健斎さんの教養）、寺子屋（格弥さんは桃園学校の初代校長）、実業学習（正次郎の養蚕学校）、の舞台装置などとして親しまれたことであろう。



2 階床開口部位置

①薬草の乾燥　②暖房装置。　③煙草の葉乾燥。　④養蚕のウイルス対策。
⑤養蚕温暖　　飼育実験。

このようにすべてを総合して判断してもどれも当てはまるが、画期的なシステムには違いないのである。

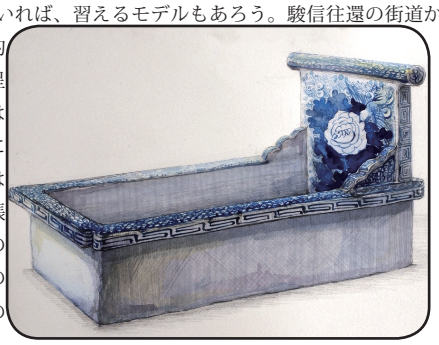
３－２－５　その他の要因

イー瓦屋根に葺き替えてあったことは、倉庫町まで大火事が迫ったが、桃園の入り口で止まったこと言い伝えが、大正前の写真（正次郎と手代の写る）で物語っている。

ロー釜戸上部屋根部と２階床の切れ込みにレンガ煙突の痕跡あり、関東大震災で崩れたと家族には言い伝えがある。

３－２－６　２階建てモダニズムのまとめ

前項までの３－２－１～３－２－５の幾つかのモノの痕跡やそれに伴う要因が挙げられた。さて、当時の背景の中で意匠的な必然性として、最大の配慮を施さねばならなかったこととして、明治初期の公の政策を見落とすわけにはいかない。江戸幕府の時代から村松家は村役人以上でなければ不可能な家構えをしてきた。それが幕府崩壊後、明治政府の政策のなかで、山梨県令藤村紫朗は「教育と勧業政策」を主に進めてきた。その時代性の中、これからの世の中の推移を占うがごとく決断して普請を続けた村松家の当主・健斎は、開国日本の中での、いまだ見ぬか、見てかの（もしかしたら若尾達からいち早く仕入れた横浜の居留地建築の情報や、医業を通してすでに常識化していた長崎の洋館スタイル）モダニズムを手探り状態で取り入れ、地元の棟梁や左官職人の知恵に置き換えて行ったのであろう。従来の医業や教育の場「寺子屋・実業の塾」、次世代の生業の場（葉タバコの乾燥から漢方用の甘草用や「蚕の飼育試験場」）、そして五代目勝格弥の「社会的な活動の場」として、個人で可能な公共空間を造り、またそれらを総合する生活の潤いとしての教養の場「清吟書屋」と自ら雅号して、その存在を示した。幕府時代に村役人の立場で公として使うための座敷の中心性から開放され、個人の豊かな生活の場の表現を実現していった座敷周りの彩りや、アーチスト（書家、絵師）たちとの協演（協働）は、健斎さんならではの人間性が溢れている。いまや現代建築では、人は己の創る意思をはっきり持ちえて造ることができる時代になってきたし、また我国では簡易に作るという目的だけで建築が可能な時代である。幕末・維新動乱期の定まらないとき、多大な資本を投下して普請を続けてきた８年間（慶応元年～明治六年～）は、健斎さんにとって医家として時代のニーズを的確に受けた故に投資可能であったのであろう。天災、飢饉、流行疫病（コレラ）が続きそれが起爆剤になり、村松家再建のきっかけとしてめぐり合わせた自らの運命や伊助の期待も重なり、世の中の秩序も変わるなか、夢や希望をいっぱいに膨らませ、しなやかに進めていった普請は、それから始まる健斎さん家族の生活スタイルの挑戦でもあった。健斎さん自身、自分の才能や財力の幅を十二分に活用して、幕府直轄地統治・市川代官所の垣根は取れたか、はたまた振り子が又逆戻りするのか、いまだ定まらぬ時代に果敢に立ち向かった意思は、時代を乗り越えるパワーを持っていた。慶応元年から始めた建築の後、それにモダンな意思（進取の気性）を傾け感性をぶつけていったお職人さんや、絵師、書家たちとの関わりを遺した結果、このユニークで愛着のある建築になったのである。モダンな洋風デザインや趣向を手探りでこうしたい、こうありたいとお職人さんにどう説明していったのであろうか？この地域にある種の美学が先行していれば、習えるモデルもあろう。駿信往還の街道からは商家蔵の伝統的な街並みの景観を呈しているが、主屋は屋敷の中に蔵の影に隠れて表通りからは正面性はない。主張するか否か、２階南のアーチ枠八窓、西のパネルシャッターの



思い切った形や彩りなどは、商家蔵竣工（明治６年５月５日）から時がそれほど経たぬうちに行ったのであろう。定かな時期は判明しないが、次代の要請を多面的に受けて、人生もう一巡りの挑戦をしたのである。そこかしこ藤村紫朗県令の掛け声のもと学校建築の槌音が響き渡っていた折、時を同じくしていたこともあろう、それらは民が造り公に寄付した学校建築や、勧業施設の官のパブリックな使われ方をした建物とは違い、村松家は私的な施設でありながら半公共的な使われ方をしていた。そこにこの建物の面白さがある。医は仁術であり、書や詩文はわかり合うための教養であり、養蚕施設は働く民の希望であり、商家蔵は経済活動（物流問屋・質・両替）の源であった。清吟書屋はそんな性格を持った建築へと成長し成熟していったのであった。

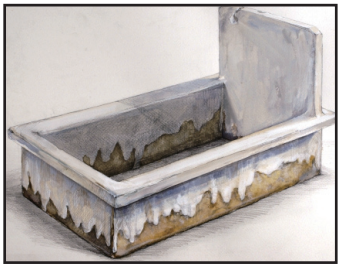
また座敷廻り室内空間の質に関しては、清吟書屋の空間分析の稿に論じてある故、今回の建築の変遷を合わせ読んでいただけたら、筆不足をいくらかでも補えるものであると理解を願いたい。

３－３その後の村松家住宅

『正次郎から重雄の時代・謹爾の役割』

明治18年1885健斎さん59歳で歿する。健斎死後村松家は実業は正次郎、医業は五代目格弥（琢太郎）に継がれた。後継者となる次男正次郎は23歳、谷干城を師事し、明治法律学校に通い始めたころである。明治21年7月22日山岡鉄舟葬儀の帰り正次郎暴漢に襲われ、素手にて刃を防ぐ（新聞記事となる）。正次郎と山岡鉄舟との関係は現存している鉄舟の髑髏の掛け軸や扁額「村松家所蔵品」も今もって見るとそれを物語るものがある。明治23年明穂村助役になっていた正次郎は、実業家（養蚕業）としての記載ものこっている。幼少期は実兄・五代目格弥（正次郎より11歳年上）が健斎さんを支え村松家の医家と公共性とを維持、守っていった。

両者の間の謹爾・四代目格弥の嗣子（明治25年歿す、享年三十八才）は東京帝国大学・医課別科を卒業(明治22年1889　六月十五日)した。健斎は両者にかなりの影響を与えたものであったでろう、また健斎さん自らが肝いりで医学を教えたといわれる形跡も遺っている「村松家所蔵品」。この時期、謹爾と正次郎は揃って東京で学んでいたこととなる。このころの医学界ではコレラ・ペストなどの公衆衛生と微生物研究が急務とされていた。謹爾は北里柴三郎が東京帝国大学・医科大学を卒業した６年後の明治22年に卒業する。明治19年蚕業講習所として東京、西ヶ原に設置された、のちに京都他の都市にも講習所が設置された。この当時の主要な研究業績は、ルイ・パストゥールの研究を基礎にした微粒子病の防止法の確立であった。また、これらの施設が蚕業教育や技術普及に果たした役割も大きい(養蚕技術の変遷史より転載)。また北里柴三郎　結核菌の発見者ローベルト・コッホ博士に師事、本格的に細菌学を研究。などなど、学生の謹弥を取り巻く状況は、ふるさと村松家の医家としての生業と商家としての実業が見えていたのであったであろう。ここで村松家の「床下温暖ダクトのなぞ」は医と実を克服するための装置として解決されてよいと思う。すなわち医業におけるコレラやペストの克服が養蚕業の萎縮病などの微生物の駆除により生産性が向上す



るための実験工学的な装置として設置したのであろう。ここに村松家ならではでなければ出来なかったであろう痕跡として理解したい。

母「ちゑ」が映子の金属アレルギーを治した庭先のドクダミ

その後、重雄は神田神保町で大同洋行なる洋書店を開く。旧友であった石本男爵やその妻加藤シズエなどの社会運動家との交友関係で、時代の要求に答えるかの動きを身をもって実業に挑戦した。今のこる大同洋行書籍部が出版した本は、1923 年初版のルイ・パストール / 佐藤俊三編の医学・衛生系や、「労働内閣まで」 澤田謙大同洋行出版部函背破 1924 などの社会運動系の本が検索されるのみである。これをみても重雄は先代たちの思いを背負いつつ、自分の世界へと変わっていくことがわかる。後に、昭和３年２月第一回普通選挙、６月治安維持法改正や、全国に特高警察設置された世の流れに逆らえず大同洋行は閉店になっていく。翌年昭和３年 1928 レストラン・メッチェンとして世界恐慌の始まりを見ながら同地（神田神保町）に開店するのであった。さて重雄の世界はどんなであったであろうか、現存する子孫やあらゆる人々の口から悪いことは聞かない。むしろ極楽トンボで、重雄ならではの楽天的な美意識をもって接した人間性に惹かれる人が多いと聞く。それに関しては、村松家の歴史（高橋辰雄著）を参考にされたし。ここでは、現存する建築との関係で、重雄がどう使ってきたかを考えてみたい。玄関のカットガラスのモダンな玄関戸やブドウ色の型ガラスの入ったスクリーン、ステンドグラスの引き戸、数々のテーブルウエアー類（銀製品）、モダンな音楽を聴いていたレコード入れなど、メッチェンを楽しんだ重雄のその時代を生きた人々の記憶が処々に遺っている。

結び（伝えられること、遺していく志（こころざし）・力（ちから））

ここに現存している村松家住宅の存在は、地域の理解なくしてはありえない。先々代の当主重雄の妻で平成十一年九十九歳で他界した長寿‘ちゑ’の語りの中で、『この家は地域の中で焼き打ち、打ちこわし等の噂や心配は一切無かったと言われてきた』と伝えられている。

重雄の妻「ちゑ」を囲む映子 (右後) と姉妹達

または村松家住宅『暮らしの生脈ＤＮＡ』年表の『住まいの自分史』を顧みると、代々地域の民の影日向になり、飢饉の折、年貢の支出を民に代わり払ってきた等、旧櫛形町史古文書からしっかりと読み取れる、地域の長の役割と使命を果たしてきたからに他なるまい。世が世で変わらねばならないのが人の生き方であるが、この村松家に暮らした人々の DNA は、その生き方をある種の美学へと昇華させるパワーを持っている。いまわたしたちがその存在に突き動かされ、この建築に向き合い関わることで、彷徨える時を乗り越えるための知恵をいただいた。この建築の変遷とここに暮らしてきた人々の軌跡が空間に反映されている。このたびの保存の趣旨は、これ以上朽ちること無く維持していくことに力点を置いた。物足りない修復と誤解される方々も多々あろう、あえて修復の手垢を遺すことで、生きた歴史を創る行為につながるとことをご理解いただき、読者は空間体験をしていただけたらと思う。建築に完璧なものは皆無である、限りある中での精一杯のクライアント（住まい手）の姿勢をどうか読み取っていただきたい。村松家住宅は、永く住みつづけ、住み込んでいく力を持ちえなければ維持保存できない建築である、その住み込む力や意欲に立会い、素材の復元や人間的なディテール技術の復権を体験し、あすの住まいの「創造・展示に置き換えられる知恵」に役立てたいと思うのである。

平成 18 年３月　　久保田　要

第３章
３－３　物語「村松家に生きた人々」
～ (1) 村松健斎・勝格弥・村松正次郎とその時代～

目　次

1　村松邸成立の時代背景

[1] 峡西の風土と幕末・維新の動向
[2] 自由民権運動と明治前期の状況
[3] 村松家と勝家の関係

2　村松家に生きた人々

[1] 基礎を築いた村松健斎の活躍
（文政９年 (1826)~ 明治１８年 (1885)）
[2] 儒医として勝格弥の広範な活躍
（嘉永４年 (1851)~ 明治４０年 (1907)）
[3] 激動の近代を生きた村松正次郎
（文久２年 (1862)~ 大正１３年 (1924)）

3　村松家・勝家の前史を探る

[1] 顕信坊（房）と村松家
[2] 位牌蔓多羅（曼陀羅）と勝家

4　その後の村松家

[1] 神田のレストラン・メッチェン
[2] 村びとが見た村松家の眺め

5　名望家・村松家の生き方

[1] 明治前期の状況
[2] 名望家の様々な動向
[3] 若尾逸平の活躍
[4] 名望家のなかの村松家

第３章
３－３　物語「村松家に生きた人々」

～ (1) 村松健斎・勝格弥・村松正次郎とその時代～

春には一面の桃の花が咲くなだらかな台地。桃園新田の駿信往還に面する一画に、古くから「イロ 屋（にんべんグチぐち）」と呼ばれる家があった。幕末から明治維新へ、村松家は、農業ばかりではない、商家、医家として、また新興資本家として活躍をみせる。そして村内の医家・勝家と深い絆を持っていた。村松健斎・勝格弥・村松正次郎の時代から百数十年にわたる歴史を、「村松家に生きた人々」のひとつの物語として眺めてみよう。

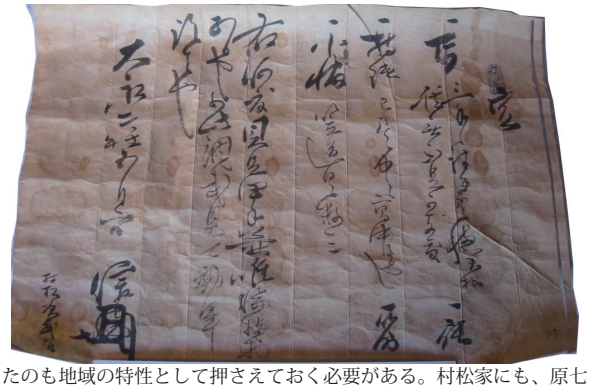
１　村松邸成立の時代背景

[1] 峡西の風土と幕末・維新の動向

村松邸のある桃園村（中巨摩郡櫛形町桃園、現在南アルプス市）は、幕末から明治維新にかけどんな社会状況であったのだろう。

桃源郷を思わせる今の風景からは想像もできないが、かつては、甲府盆地の西方（西郡（にしごおり））に位置する「原七郷」と呼ばれた水の乏しい厳しい風土であった。御勅使川の巨大な扇状地は、ほとんどが荒れはてた砂礫の原野。古来、原方（はらかた）と呼ばれ、一帯の村々、上八田、西野、上今井、桃園、吉田（十五所、沢登）、小笠原、在家塚では、雨が降らねば干魃、降り過ぎれば洪水となる水との闘いを強いられてきた。寛文年間 (1661~1673) に御勅使川の水を利用した徳島堰が開鑿され、水利の改良が図られたが、根本的な解決は三百年後、戦後の野呂川水源の開発と釜無川右岸地区土地改良事業まで待たれた。数百年にわたる「土地の記憶」が、物語の主人公のひとり・勝格弥にとっても解決すべき大問題であったことが、明治初年の彼の日誌から窺える。

山々に囲まれた厳しい風土、古来、稲作の乏しさは甲州全体にも言えることだった。この一帯でも僅かの田畑に稲や雑穀（稗、粟、麦、大豆、小豆）、桑を植え野菜（人参、牛蒡、大根、菜）を育て生計をたててきた。西郡（にしごおり）は、おしなべて闊達で時に荒々しくもある人心の風土である。武田信虎、信玄の時代から「野売り」の免許を与えられと伝えられた、行商を糧とした「甲州商人」のルーツのひとつ。早くから商いの気風を培ってきたのも地域の特性として押さえておく必要がある。村松家にも、原七郷者宛の「曝柿売買並諸商会免許」を伝える天文１８年 (1549) の古い書



状が残されている。

時代が下るにつれ備荒食料として甘藷、馬鈴薯も普及するが、日常口にできたのは、雑穀が中心であったという。それも、必ずしも遠い記憶ではない。幕藩体制が続く江戸時代も中頃を過ぎると、換金作物である煙草、木綿の栽培が盛んとなり、次第に商品経済が発達、やがて村内の生産力も増

していく。そして養蚕と生糸の流通が地域経済に大きな比重を占めるようになった。資本を蓄積した豪農層が頭角を現すようになるのも、まもなくのことであった。

山に閉ざされた環境にありながら、商業の発達と共に広く遠地と交流する流動性を持ち合わせていたことも、また重要である。富士川（釜無川）の流れに沿った駿信往還は、甲州から東海道に通じる。近世から幕末、明治前期まで長く使われた富士川舟運の役割は、今からは測り知れないほど大きかった。まさに大動脈、人の行き来はともかく江戸への物流の中心は、甲州街道よりむしろ富士川舟運であり、船荷は下り米と上り塩に代表される。明治初年にも、蒸気船による新たな通船計画が立てらてたほどだった。キリスト教はじめ近代化の息吹も、多くこのルートで甲州に入ってきた。橋梁やダム、発電所など近代化を押し進める諸施設の建設資材も、この富士川を上って運ばれる。文人墨客はもちろん、旧幕府関係者が移された静岡県にもほど近く、旧幕臣の往来も多かったと思われる。村松健斎の江戸への旅も、この富士川舟運を度々利用していることが、旅日記の記載から窺える。河岸のあった青柳、鰍沢、黒沢、また市川や小笠原の宿は大いに賑わい、近隣の村々からも人を集めたことだろう。後に明治１１年 (1878)、村松健斎が貸付商会を出店したのは、鰍沢の町だった。近代鉄道の中央線が甲府まで開通するのは、だいぶ先の明治 35 年 (1902) のことだ。

幕末から明治維新にかけ、様々な人が足繁く行き交った。嘉永６年 (1853) には、ペリーの黒船が開国を迫って来航、安政６年 (1853) 横浜が開港すると一群の甲州商人は早くも横浜へ向かった。混沌とした幕末の状況下、村松伊助は文久元年 (1861) 皇女和宮の下向に際し、中山道下諏訪宿への助郷を申し付けられている。新旧錯綜しながらも時代は大きく変わろうとしていた。甲州にも新政府軍が入峡、やがて戊辰戦争も終焉し、慶応４年 (1868) 御一新を迎えた。

[2] 自由民権運動と明治前期の状況

明治初年の新政府の課題は、廃藩置県後の土地の再編と税の徴収であったと言っても過言ではない。桃園村は幕末まで甲府代官所また市川代官所の支配下にあった。初め大小区制により旧村規模を越えた区戸長を通じて一貫した支配体制が求められたが必ずしも成功せず、明治８年 (1875)、小笠原・桃園・山寺が合村し明穂村が誕生した。

明治５年 (1872)、それまで甲州の山梨・八代・巨摩三郡に適用されてきた「大切・小切法」の廃止に反対する大規模な農民一揆が山梨郡（栗原・万力筋９７ケ村）を中心に起こった。農民側の敗北に終わったいわば最後の一揆といえる騒動であり、明治２２年 (1889) の帝国憲法公布、明治２３年 (1890) の国会開設を控えた明治１０年代 (1877~1887) の自由民権運動の高揚と衰退にも、またその後の地域の政治動向に大きな影響を与えたといわれる。翌年 (1873)、「大小切騒動」の後を受けて着任した若き権令・藤村紫郎 (1845~1908) は、近代化を鼓舞し殖産興業を強力に押し進め、明治前期の山梨に大きな影響を及ぼした。明治７年 (1874) 勧業製糸場が操業を始め、山梨県の製糸業は驚異的な発展を見せ、山間地の養蚕業まで活況を呈した時代がやってきた。

天領（幕府直轄領）と三卿領（田安家・一橋家・清水家）支配が長く続いた甲州には、武士階級はいなかった。幕末の混沌とした幕間には、神官や博徒、旧武田氏浪人さえ登場した。在地のリーダーとなるほどの士族層は皆無であったと言っていい。明治維新の近代化を担ったのは、むしろ数少ない在地の豪農出身の若き俊才たちであった。また若尾逸平 (1820~1913) らの地主商人のしたたかな投機的な活動も、時代と共に広範でダイナミックな影響を及ぼしていった。

熊本藩出身の藤村紫郎や後に自由民権運動のリーダーになり、上からの改革を進める藤村と、それと対立する水戸藩出身の佐野広乃 (1853~1882) のような外来の才能も、それぞれの立場から果敢な刺激を与えていったことは確かだ。この間、明治１２年 (1879)、民権派の機関紙「峡中新報」が創刊。紆余曲折の末、明治１６年 (1883) には、民権派３党が合し峡中立憲党が結党、勝格弥も有力メンバーとして参画している。自由党の板垣退助は、明治１３年 (1880)、１５年 (1882) と二度入峡、また明治１３年 (1880) の明治天皇巡幸は御一新の到来を民衆に知らしめる一大ページェントとなった。自由民権運動はほどなく衰退、国会開設が現実のものとなる明治２０年代には、「民権自由草」「民力休養草」等の名の煙草の銘柄まで現れる。時代の気運は大きく変わった。明治２１年 (1888) 刊行の『峡中沿革史』（望月直矢）には前後の状況が適確に論評されている。

明治前期の激動の時代に、村松家の人々がどのように関わって生きたか詳細な検討はまだこれからである。この項のテーマ「自由民権運動と明治前期の動向」をある一家の営みから語ることができれば、有意義な論考になると思われる。（＊「（５）名望家・村松家の生き方」でもう少しお伝えする。）

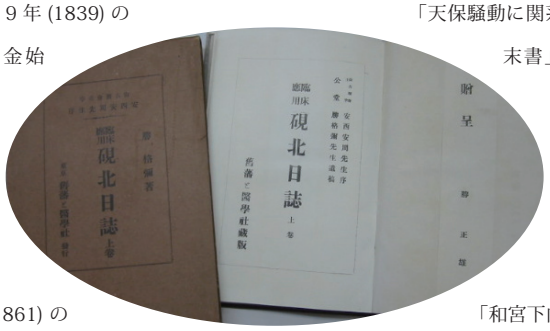
[3] 村松家と勝家の関係

●村松家の系譜

・・村松伊助 (1798~1876)・・・村松助右衛門・・・村松健斎 (1826~1885)・・・村松正次郎 (1862~1924)・・・村松重雄 (1896~ 1974)・・・

＊村松健斎の長男琢太郎は勝家養子として５代勝格弥となり、次男正次郎が村松家を継ぐ

幕末の村松家の隆盛を支えたのは、長命にして動乱期を生き抜いた村松伊助 (1798~1876) だろうか。その活躍は『櫛形町誌資料編』の古文書から窺える。年とともに組頭、長百姓、名主と村内でも重きをなし、農業生産のかたわら酒造や両替等多分に商家的な活動にも手腕を発揮したようだ。天保９年 (1839) の「天保騒動に関係する出金始末書」や文久元年 (1861) の「和宮下向助郷顛末」等、実に長く家長の地位にあったと思われる。



次代の村松助右衛門の名は、明治５年 (1872) の維新政府の強いる新税制に反対した「大小切り騒動」に呼応する「大小切御居置嘆願」に見られ、興味深い。武力蜂起は山梨郡だけだったが、全県的な問題であったことがわかる。村松伊助の活躍に比べれば、助右衛門は、やや短命だったのだろうか。ほどなく健斎の活躍が始まる。桃園村村医として名高い医家の家系から入婿を求めたのも、村松伊助の手腕ではなたったかと推測される。また明治１１年 (1878) の県令・藤村紫郎宛「桃園より明穂事務所移転促進方願い」には、村惣代として勝格弥、村松健斎の署名があり両家の村内での地位が窺われる。

●勝家の系譜

・・初代勝格弥（勝田司馬）・・・２代勝格弥・・・３代勝格弥 (1786~1855)・・４代勝格弥（勝格斎 1820~1876）・・・５代勝格弥 (1851~1907)・・・６代勝格弥（勝謹弥 1856~1893）・・・

＊３代勝格弥の長男格斎は家を継ぎ、次男勝健斎は村松家養子となり村松健斎となる

＊『臨床応用 硯北日誌』を出版したのは、５代勝格弥の嫡子の勝正雄だろう。

『甲州儒医列伝』（村松学佑）によれば、桃園村医である勝家は、文政５年 (1822) に没した勝左司馬（『櫛形町誌』では、勝田司馬）に始まるという。代々勝格弥（格也）を名乗る医家として聞こえ、３代勝格弥（本道）は、文政期 (1818~1830) には医業のかたわら村内子弟を教えた。また書道に巧みであったといわれ、安政２年 (1855) に没した。４代勝格弥（格斎—開堂）は明治５年 (1872) に西郡筋医務取締に擧げられ、明治９年 (1876) に５７才で没した。その弟・健斎は桃園新田の村松家に入婿し村松健斎となり、兄弟共に外科に長じ広範な活躍を見せ、明治１７年 (1884) に没した。その長子・琢太郎は、父の生家・勝家に入婿し５代勝格弥（公堂）となり、医家また民権家として活躍、『臨床応用 硯北日誌』を残した。『峡中自由諸名士略伝』に名を列ねるのは、明治４０年 (1907) に５７才で没したこの５代勝格弥である。嗣子の勝謹弥もまた医学を目指し明治２２年 (1889) 東京大学別課医学を卒業したが、明治２６年 (1893) ３８才にて没した。桃園区有文書に度々見られる代々の勝格弥の署名からも、一貫して医家として重きをなした様子が窺われる。

2　村松家に生きた人々

村松重雄の３女様からの聞取り調査は、修復工事を進めながら数度に及び、これからの広範な関連調査への貴重な手掛かりを得た。幕末から明治初期にかけて活躍した村松健斎と勝格弥、また次代の村松正次郎は明治中頃から活躍を始める。明治末から村松重雄の時代を前後し、事業の展開と家人の活躍は次第に東京に移っていく。時代が下るにつれリアルな体験と重なり話は多岐にわたり、よく聞く著名人との交流のエピソードは多数聞かれた。

とりわけ興味深かったのは、村松健斎父子と幕末の志士や維新政府や財界の要人との交わりであったが、なにぶん伝聞からの考察は難しい。エピソードの紹介にとどめ今後の研究につなげたい。今回新たな視点が見えかけてきたのは、昭和４０年１１月の山梨の自由民権運動の研究家・酒井常春氏の村松家への調査探訪から考えたことである。その時対応したのが並木昭子さん自身であったことは興味深かった。酒井氏は、その頃県下の豪農・民権家の家系を精力的に踏査していたそうだ。あまり知られていない勝格弥の活動の実像から明治前期の山梨の政治動向の一端を掘り起こせる可能性を感じた。ここでは、前史として、江戸時代末期に村松家を繁栄させた村松伊助、村松助右衛門の姿を遠望しながら、村松邸成立に直接関わる村松健斎、勝格弥、村松正次郎の３者の活躍を追ってみたい。

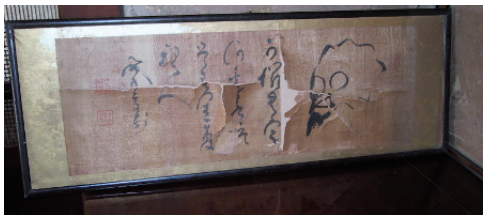
[1] 基礎を築いた村松健斎の活躍 (文政９年 (1826)~ 明治１８年 (1885))

村松健斎は、村内の医家、３代勝格弥の次男として文政９年 (1826) に生まれた。医師としての修業の後、村松家に入婿し村松健斎となった。村惣代としてまた勝本家の兄４代勝格弥（格斎）と共に医師として活躍した。今に伝わる村松邸建築の多くは、健斎の手になると思われる。主屋書院の数々の意匠、舟雪、霞湖などの画家に描かせた襖絵から、その闊達な人柄が窺える。自邸を「清吟書屋」と呼び、ある種の文化サロンとも、また自家経営の拠点にしたようだ。「清吟主人」の呼び名は、勝格弥の日記にもしばしば登場する。家内でもごく日常的に使われていたと思われ、「清吟書屋」の記憶はかなり後年まで続いた。

今なお健斎が使用した漢方医薬箱が伝わっているが、その後の医家としての発展は、勝家とはまた違う。後年、孫の村松重雄の時代に、共栄医療組

合病院（現在の巨摩共立病院に発展）が当家を利用して発足、一時期は地域の医療保健施設として使われたり、商家蔵でレントゲン写真を撮った記録もあり、医家の伝統は長く続いたが、やはり明治初年の村松家には、農業と養蚕業を基盤にしながらも商家的なベースが強くあったのだろう。地域の豪農たちの動きにも連動し、維新の気運と共に新興の資本家として、時代の政治経済に積極的に参画。明治１１年 (1878)、金融貸付商会（本社鰍沢）を起こしたり、開港後の生糸貿易で活況を見せ始めた横浜商金銀行にも出資して事業家としての活躍が始まる。

同じ甲州（東油川村）の豪農の出身、いち早く横浜に乗り込み生糸の貿易商として基盤を築きつつあった甲州屋・篠原忠右衛門 (1809~1891) や近くの在家塚村（白根）の出身、後に甲州財閥を築く若尾逸平 (1820~1913) の活躍は大きな刺激になったはずだ。やがて子の代まで若尾逸平とは、親



しく付き合う間柄になっていく。幕末期には山岡鉄舟が泊まったことがあったそうだ。維新推進派に多大な軍資金を提供していたとの伝聞も、山岡鉄舟の幾多の掛軸や前田公爵額、三條実隆公連歌帳等当地には場違いのような遺物や、村松家を継ぐ次男・正次郎を山岡鉄舟や谷干城の下で容易に修業させたことを考えれば、十分ありうることだろう。遺品の品々や室内の装飾は、有名無名の文人墨客の寄寓を物語る。また相当な人物への支援も惜しまなかったようだ。これらの人脈は、子の格弥や正次郎の養育にも多大な影響を与えたと思われる。

明治新政府が進める大区小区制による旧村の再編で、明治８年 (1875) 小笠原、桃園、山寺が合村し明穂村が発足、前後の村内調整にも晩年になるまで奔走してたようだ。近代化の行方を夢見ながら波乱万丈とも思える生涯をおくり、村松家のその後の礎を築いて、明治１８年 (1885) に５９才で没した。

[2] 儒医として勝格弥の広範な活躍
（嘉永４年 (1851)~ 明治４０年 (1907)）

勝格弥は、嘉永４年 (1851) 村松健斎の長子・琢太郎として生まれ、八才にして伯父・勝格斎の養子となり、後５代勝格弥（公堂）を継ぐ。両家の内々の了解があったのだろうか。父の出た勝本家に戻ったことになる。若くして江戸に出て、儒学を矢口謙斎にまた医学を浅田宗伯に学んだ。郷里桃園に帰村し開業、榊村の村医も兼ねた。明治１５年 (1882) には県下で１500 人ほどの死者を出したコレラ流行を記している。儒学に深くまた詩文をよくし熱心に子弟を教え、明治６年 (1873) 蓮経寺を仮用し創設された桃園学校（後の桃園尋常小学校）で

は、初代校長を勤めた。『臨床応用 硯北日誌（上）』には、明治８年 (1875) から１６年 (1883) までの貴重な日記が記されている。

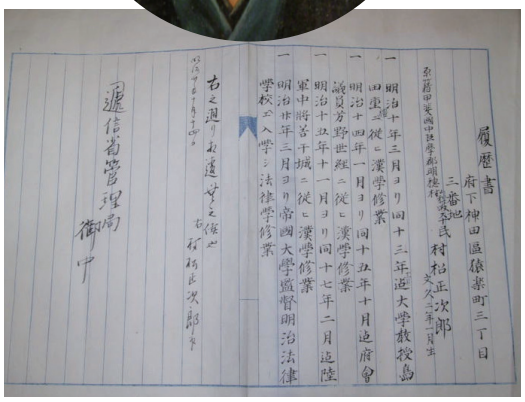
とりわけ明治１６年 (1883) 元旦の日誌には、年頭の所感を４項にまとめて決意を新たにし、また実践している。

１漢医道ヲ挽回スル事
２立憲政体ヲ立ルニ尽力スル事
３早川開鑿ノ結果ヲナス事
４家産ヲ豊饒ニシ子孫ノ策ヲ立ル事

まさに深い儒学思想に裏付けられた立派な人格をなし、医道に専念しながらも広範な活動に奔走した。温知社員として西洋医学導入期の漢医道挽回運動に参加、また峡西の民権運動家として新津真らと活動を始めた。明治２０年 (1887) ４月１８日の日誌には「余医ナリト雖モ敢テ医ヲ発スルニ非ズ、内外ノコトニ感ジ暫時俗務ニ従事セントス」と記す。明治２０年 (1887) から２２年 (1889) まで明穂村戸長も勤め , 県下の政治にも重きをなし、明治４０年 (1907) に５７才で没した。

これより先、明治１６年 (1883) 郷党の先輩格、八巻九萬、薬袋義一、古屋専蔵、依田頼之、小田切謙明、（佐野広乃）らと共に峡中立憲党の結成に尽力した。明治２３年 (1890) ７月の第一回衆議院総選挙では、八巻九萬のために演説、第１区八巻九萬、第２区古屋専蔵が当選した。また同年６月１３日の日誌には、先んじて行われた貴族院議員選挙に触れ「若尾逸平氏貴族院議員トナル、余ハ其間ニ周施セリ・・・」とあり、すでに基盤を築きつつ政財界に強い影響力を持ち始めた同郷の実力者・若尾逸平との親しい交流を窺わせる。

昭和４０年 (1965) に近代史研究家の酒井常春氏が村松家を訪れた時には、期待されたほどの資料がなかったのか、ずいぶん失望された様子であったという。「山梨県自由民権運動における佐野広乃関係文書」等で展開しようとしていた思想的なテーマとは、村松家の雰囲気はいささか違ったのだ



履歴書
府下神田區猿楽町三丁目
三番地
東籍甲斐國中巨摩郡明穂村
平民　村松正次郎
文久二年一月生
一　明治十年二月ヨリ同十三年迄大学教授島田重禮ニ従ヒ漢学修業
一　明治十四年一月ヨリ同十五年十月迄府會議員芳野世經ニ従ヒ漢学修業
一　明治十五年十一月ヨリ同十七年二月迄陸軍中將谷干城ニ従ヒ漢学修業
一　明治十年三月ヨリ帝國大学監督明治法律学校ニ入学シ法律学修業
古之遇り知遇ヲ之保ス
明治廿五年十月廿三日
村松正次郎
運信省管理局
御中

ろうか。それでも譲られた『臨床応用 硯北日誌』を、酒井氏は論文の一部に使っている。たぶんに酒井氏の興味とはずれたところに、村松家の実像があったのかもしれない。探索の果てのその僅かな隙間にむしろ村松家存続の生きたリアリティがあるのでないか、と私は考えている。民権活動家としての実像もまだ十分に研究されておらず、同日誌の詳細な読み合わせと共に活動の解明が待たれる。村松正次郎の実兄であり村松家のその後の展開を側面から考える有効な手立てになるのではないか。

[3] 激動の近代を生きた村松正次郎
(文久２年 (1862)~ 大正１３年 (1924))

村松正次郎は、村松健斎の次男として文久２年 (1862) に生まれ、兄（勝格弥）に代わり村松家を継ぐ。若くして上京し山岡鉄舟に学ぶ。明治２１年 (1888) に没した山岡鉄舟の葬儀には、正次郎が参列、葬儀の帰りに暴漢に襲われ素手で刃を受けたとの豪快なエピソードも伝わっている。明治１０年 (1877) 著明な漢学者・島田重礼（篁村 1837~1898）の雙柱精舎で漢学を学び多大な影響を受けた。実兄の勝格弥もまた島田重礼の薫陶を受け、その著『臨床応用 硯北日誌（上)』には島田重礼撰文の「勝格斎翁碑文」が収録されている。

明治１５年 (1882) には、嘉納治五郎の講道館に学び免許皆伝を得、明治１５年 (1882) から１７年 (1884) の間、谷干城の書生になり修行を重ねた。さらに明治２０年 (1888) には、明治法律学校（後の明治大学）にも学んだ。谷干城 (1837~1911) は、土佐出身の軍人・政治家、戊辰戦争で板垣退助指揮下の軍監として入峡、甲府城を目指す「甲陽鎮撫隊」を勝沼で激破したことでも知られる。台湾出兵、西南戦争の熊本鎮台指令長官、第一次伊藤内閣では農商務大臣 (1885~1888) を勤めた。明治２２年 (1889) 杉浦重剛らと日本倶楽部を結成、大隈外相の条約改正に反対。その立憲思想は、後年、国粋主義に傾いていく。また日露戦争に反対したことでも知られる。正次郎は晩年まで杉浦重剛 (1855~1924) の活動に資金援助を続けていたという。

正次郎が活躍し始めるのは、まさに近代日本が躍動を始める時期、逓信省にしばらく勤めた後、山梨と東京を行き来する活躍が始まる。

明治２１年 (1888) の市町村制の公布と共に、明穂村の助役（村長・竹川房太郎）の要職にも就いている。明治２７年 (1894) 発行の『山梨繁昌明細記』中巨摩郡明穂村の項では、村松家の生業は養蚕業となっているがその内容は幅広く、遠来の塩、油、たばこの販売、造り酒屋、両替商のほか、やがて新興の銀行や会社（富士紡績株式会社、山梨製糸株式会社等県内に限らず東京の企業も多数あると思われる）にも出資し事業の拡大を図っていった。

明治２６年 (1893) 製の村松、若尾、北村（鏡中條村、正次郎母の実家）の有力三家が共同で誂えた「揃いの漆器セット」が残されている。巨大財閥・若尾逸平とは規模は比べられないとしても、その心意気は重なり行動を共にしたことも度々あったのだろう。若尾逸平の死後、逸平の墓碑は正次郎が書いたと言われ、甲州財閥の中心人物とも親しく交わっていた様子がわかる。また明治３６年 (1903)、明穂村村長から県議会議員に当選した竹川房次郎氏の礼状が残されている。「大久保に家があったが、長男重雄はどこへ行くにも父正次郎といっしょで、父が田舎から上京し国会か伊藤博文に面会に行く時には、必ず山王ホテルに泊まり、身を清め衣服を正してから出かけた」との、政財界の要人との行き来を裏付ける伝聞はこればかりではない、重雄氏から数多く聞かされたという。家業を繁栄させながら、

在地の山梨と東京を結び政財界に重きをなし、大正１３年 (1924)) ６３才で没した。「最後の死水は偉い先生が取って下されました」との、晩年の妻ちゑの逸話がいつまでも心に残った。

3　村松家・勝家の前史を探る

修復中に直接家内に立入らず可能だった、村松家の前史に若干触れてみたい。つまり、村松邸建築に直接関係する村松健斎、勝格弥、村松正次郎より前の「村松家・勝家の前史」を、村松家の墓所「顕信坊」と勝家の「位牌蔓多羅」を手掛かりに考えてみる。その前史もまた、村松邸の有り様に、少なからぬ無意識的な影響を与えているからだ。

[1] 顕信坊（房）と村松家

村松邸の南に道路を挟んで二軒の人家を連ねて隣接する不思議な一画がある。国道と廃棄道との間をつなぐ空地には小さな公民館（桃園東小路公民館）がたち、小道を挟んで道祖神場の小祠が残されている。辺りの景観からすれば、どう見てもちょっとしたポケットパークに見えてしまうが、実は、ここは長い歴史を持つ村松家の墓所「顕信坊（けんしんぼう）」である。たぶんにセミパブリックな気分を漂わせ、近隣の住人もふだんは意識もしない。ふと「旧墓所・顕信坊跡」などと言ってしまいそ

うになるが、現に今なお生きている墓であり、村松家の当地への定着と遥かなルーツを物語る重要な場所である。三女の母・ちゑの終戦直後の日記からは、顕信坊を頻繁に訪れ供養を重ねていた様子が生き生きと窺える。

蓮経寺住職・深沢春雄氏に見せていただいた資料『日蓮宗寺院大鑑』によれば、「顕信坊（房）」は市之瀬の高峯山妙了寺を本寺とする村松家由来の私寺と見られる。正徳４年 (1714) の開創で、開山は修学院日道。村松助右衛門の先祖・宗円院日珠信士の菩提のため建立、初め「顕信坊」と称したが、天保年間 (1830 ～ 1844) に寺号を改めたとある。また別資料『大観』では、開基を村松伊助とし創立を享保元年 (1716) としている。現在は、同桃園の松久山蓮経寺の末寺とされている。村松家・勝家の墓所はこちら蓮経寺にもある。

明治２８年 (1895)、村松正次郎の代に提出された『取調書 中巨摩郡明穂村顕信房』には、同様の開山由来のほか、駿信往還に参道を経て面する梁間六間ほどの本堂の配置図が載せられている。また本尊由緒のほか仏像多数も記されているが、今はその行方は分からない。三女の幼少期の記憶によれば、敷地内には池があり春には美しい桜が咲いたという。何度かに渡る敷地整理で縮小されていて、往時の規模は現況よりかなり大きかったと思われる。妙に目新しく見える石柱は、昭和６２年 (1980) 村松重義氏（村松正次郎孫）によって建立されたものだ。開基の先祖を記すこの石柱が物語るように、改装したこの時点以前にすでに古い墓碑はかなり整理されていたようだ。ルーツをたどるべきもっと古い朽ちかけた墓石は、西端にまとめられてある。

後で伺うと、これらの一群は「顕信坊」にいた修行僧や住職のものであるという。北端に並ぶ立派な石塔こそ、村松家累代の古い墓で、文久、嘉永、天保・・・と遡れ、時代も「顕信坊」の草創期を傍証する。左端の村松健斎が明治３年 (1870) 建立したものが最も新しい。時代の古さだけではない、こちらの墓石の家紋は、すべて、円に扇形の「古い源氏紋」であり、蓮行寺にある、戦中戦後の混乱期を経て整理され、こじんまりと並べて配置されている村松家・勝家の両墓所の墓石は、すべて村松の家紋として今に伝わる「円に梶の葉」である。この間の、何らかの変化再編が想像される。我々が注目している、現村松邸の建築群が順次建て代えられていった村松健斎（また勝格弥、村松正次郎）の時代こそ、家運が拡大隆盛し勝家との絆も深まる大切な時期であったことを物語っていよう。

よく見ると時代を遡る遺物は、まだこの狭い敷地の随所に窺われる。数基残されている宗祖・日蓮大聖人遠忌報恩塔だ。今では一列に並んで建てられているが、数百年の時を重ねて、ひとつひとつそれぞれの時代に思いを込めて建てられたのだろう。最も新しい「宗祖・日蓮大聖人七百遠忌報恩塔」は、昭和６２年 (1980) に建てられたもの。５０年ごとにきちっと建てられ、最古のもには、安永、天明期 (1780 年頃) の五百遠忌のものであり、その歴史の古さを伝えている。

もうひとつ並木昭子さんのもとで保管されている木製の扇額は、往時の「顕信坊本堂」に掲げられていたものだという。鎌倉時代弘長元年 (1261) の日蓮の来訪を伝えるもので、吉田兼益と記されている。確定はこれからの作業だが、気の遠くなるほどの時間を経て同寺にもたらされたものか。あるいは後の時代に作られた寺宝なのか。専門的な調査が待たれる。

今回は詳しく触れないが、西に隣接する「桃園神社」との境界も今とはずいぶん違っていたようだ。そもそもどのような性格の神社であったのか。『櫛形町誌』等の説明でよいものか。地名「桃園」の由来も、村松家との関係もまだよくは分からない。かつては桑畑に囲まれていたとか、さらには村松家にいたる古い水路があったとか多くの伝聞を耳にしたが、いずれにしろ、明治期の神格再編、昭和５年 (1930) の甲府電車軌道（後の峡西電鉄、通称「ボロ電」）の開通による線路敷設、また駿信往還（後の国道５２号線）の度重なる拡幅工事で、そして戦後の農地改革期を経た混乱で、本来の寺域、社域はかなり曖昧になってしまったのだろう。「顕信坊」のさらなる調査と「桃園神社」との関連、またその周辺をも含む適切な保存が望まれる。

[2] 位牌蔓多羅（曼陀羅）と勝家

村松邸保存に付き、その歴史的背景として、なぜ村松家・勝家の両家を併せて語らねばならないかは、すでに触れている。幕末から明治初期にかけ、村内の医家・勝家から村松家に入婿し村松家を新たな活力で盛りたてたのが村松健斎であり、その長子は勝家に入婿し医家を再興する勝格弥、そして次子が村松家を継ぎ、東京～山梨を行き来しながら活躍した村松正次郎であった。その興味深い事実は、その前史の調査にも、また後史を語るにも無視できないポイントである。

この「位牌蔓多羅」は、５代勝格弥（公堂）が残した『臨床応用 硯北日誌』をまとめあげ、昭和９年 (1934) に出版した勝正雄氏が村松家に託したものである。勝格弥の嗣子・勝謹弥もまた医学を目指し明治２２年 (1889) 東京大学別課医学を卒業したが、明治２６年 (1893) ３８才で早世した。勝格弥も明治４０年 (1907) に没し、勝家の医家としての長い歴史はここで途絶える。次代を継ぐ勝正雄氏が前後の事情を後代につなぐ役を担ったわけであるが、勝家の衰退により、深いつながりのある村松家に保管され

ることになったという。

医家・勝家の創始、『甲州儒医列伝』（村松学佑）で文政５年 (1822) に没したとされる勝左司馬、また『櫛形町誌』の勝田司馬なる人物は、どの資料に拠ったものか定かではないが、この「位牌蔓多羅」の左上端の寛政１０年 (1798) に８８才で没した「佐司馬養母」の勝佐司馬だとすると、ほぼ矛盾なく裏付けられる。

ともあれ、明治２１年 (1888) に再製された旨の添え書きはあるが、書込まれている戒名と没年は、繰り返し書き重ねられ、古くは元禄６年 (1693) から、新しくは戦後の勝正雄氏自身まであり二百数十年に渡る。ヌケやバラツキはあるにせよ勝家の動向を知る貴重な資料であることは間違いない。

医家としての勝家の創始は、1700 年代後半～ 1800 年前後であろうと傍証されたとしても、勝家そのもののルーツは、どこまで辿れるものか。山梨県下でも珍しい家名に属し、『甲斐国誌』等の基本文献でも、調べては見たがまだ確認できていない。新しい『山梨県姓名歴史人物大辞典』（角川書店）でも、勝氏の記載はない。現在この「位牌蔓多羅」を保管されている三女さんがしきりに気にしている、中央に大きく記されている「身延山代々 南部氏先祖代々」と「高峯山代々 勝氏先祖代々」のパラレルな記述は、いったい何を意味しているのだろう。もちろん身延山とは、日蓮宗総本山久遠寺のこと、文永１１年 (1274)、日蓮によって開創された。南部氏・波木井実長に迎えられ身延に入り、後を継ぐ 日興、日向など六老僧の時代、また中興の日朝の時代を経て次第に宗派としての様相を整え勢力を広げていった。高峯山とは、市之瀬の高峯山妙了寺のことだろう。宗祖直弟・妙了日仏尼の開創で、一子日了により正応元年 (1288) に開かれ、後「裏身延」と通称されるほど隆盛した大寺である。

中世、近世を経て、日蓮宗が富士川流域の村々に広がり、どんな階層にどんな意味合いを持って受け入れられていったのか。それ以前の宗教勢力のうえに新たな勢力を拡大していく過程は、さぞドラマチックなものだったろうと想像される。それにしても、日蓮宗を庇護した南部氏と対等の立場にある勝氏とは、かなり古いルーツを持つ家系と考えなければならない。あるいは、かような「位牌蔓多羅」を擁して宗教権威・日蓮宗と結んで当地に定着した一族なのか。

甲斐源氏の一流・南部氏は、加賀美遠光の三男・光行が南部に移り南部氏と称したことに始る。南部光行は源頼朝の奥州征伐に従い転戦し、奥州糠部五郡を領し盛岡に定着した。その四子・実長だけが甲斐の旧領地に残り、波木井氏を称したが、実長から８代の政光の時、明徳４年 (1393) に陸奥国糠郡八戸に下向している。武田氏が勃興し、やがて武田信虎、信玄の活躍する戦国期には、すでに主力は奥州に移っている。甲斐国内においては、鎌倉幕府成立に前後するきわめて中世的な勢力であった。

先に紹介した「顕信坊本堂」に掲げられていたとされる扁額の年代・弘長元年 (1261) とは、日蓮が「立正安国論」を書き、伊豆に流される頃。東アジアは緊張する「蒙古来襲」の時代であった。その由来と真偽は詳しい調査を待たねばならないが、日蓮宗身延山久遠寺との行き来を思わせる古文書も他にも残されているというから、もし確証が得られるとすれば、勝家そのもののルーツは、医家・勝家の創始より、さらに数百年前という途方もない話となる。目下の幕末から明治前期に渡る村松家調査の課題を越え、想像力を遥か鎌倉期以前にまで広げなければならなくなってくる。ふと聞き流していた、村松正次郎妻・八重の「本家・勝のことは、最後になった勝正雄が成田山の図書館に（遺品）を寄贈してあるので、そこで調べれば分かる」との証言も改めて注目してみたい。

4　その後の村松家

その後の村松家の動向を語るうえで、正次郎の長男・村松重雄の生涯は是非知りたいところである。幼少期から父・正次郎に連れられ、しばしば行動を共にし幾多の歴史的な人物とも会っている。ある意味では、村松家を隆盛に導き手広い活躍を見せた村松健斎、勝格弥、村松正次郎の遺産をもっとも豊かに受継ぐ立場にあった。そのような父の薫陶は正次郎自身もまた先代の健斎から受けたものだったろう。しかし重雄氏は、明治後期から大正・昭和を迎え、やがて戦時に突入する前三者以上に困難な激動と変革の時代を生きることになる。良くも悪くも先代、先々代の生き様の結末でもあろうか。大家の余力とも思える生き方だった。そして今につながっている。この重雄氏が、聞き取り調査の並木昭子さんの父に当る。

一族・親戚にまで広げればエピソードは切りがない。高樹子爵から譲り受けた国宝級と思しき小太刀は、重雄氏の弟・保が大連に行く時に護身用に携え、そのまま大連の質屋に流され大陸の藻くずとなったとか、重雄氏の妻・ちゑの伯父に当る河野熊吉は、上海の日清貿易研究所（後の東亜同文書院）に学び、通訳として活躍、後に台湾でマラリアに罹り亡くなったとか、活躍の場は大陸・中国へ海外へと、まさに日本の歴史を先取りしたかのように進む。たぶんにプライベートなことがらに及ぶが、印象に残った二つのエピソードをお伝えする。

[1] 神田のレストラン・メッチェン

村松重雄は、明治２９年 (1896) に村松正次郎の長男として生まれた。父・正次郎は３４才、祖父・健斎はすでに没している。

正次郎は、明治２３年 (1890)、大井村大久保家の寿計代（すけよ）と結婚、家を継ぎ明穂村助役などを勤めながら事業を広げ、東京～山梨を忙しく行き来していた頃である。まもなく長女・美祢、次女・てるが生まれ、重雄

が誕生してから、次男・保が生まれている。後、寿計代が亡くなり、明治３８年 (1905) に増穂村志村家の八重（やえ）と再婚、後妻とした。大久保家に預けられた美祢や保と違い、父・正次郎はどこへ行くにも重雄氏を同行したという。重雄氏は伊藤博文はじめ幾多の政財界の重鎮にも出会っている。学校も実業家としての教育も、正次郎の敷いたレールに従ったまでだが、やがて向かう大正・昭和は、父が生きた日清・日露の明治とはまた大きく違っていた。

再婚後、正次郎一家は東京の青山に住んだ。そして大正１３年 (1924) に正次郎は６３才で青山の当家で息を引取った。重雄氏は、郷里市之瀬の山本家のちゑと結婚、２男５女が生まれた。青山の家近くには、高樹子爵邸や岡本家（岡本逸平、かの子夫妻、岡本太郎）があり、交際が続いた。重雄氏の長女・久子は、祖母・八重に頼まれよくお使いをしたことを覚えていたという。

さて、村松重雄は昭和を迎えると神田神保町に家を構える。重雄氏の代になるとほとんど郷里・山梨を離れ、村松家は東京で事業を拡げることとなる。父から継いだ莫大な資産やいくつかの会社の経営にも名を連ねたが、家人によれば、時代の行方を見すえて事業に専心するような気質ではなかったらしい。写真から窺える風貌は、父までの時代とはどこか違った方向を向いているように思えてならない。正次郎から譲られたかなりの人脈を持ちながら、政治的な動きへの関与も積極的ではなかったようだ。

第一次世界大戦が終わり、時代もまた大正デモクラシーからモボ・モガの昭和へ。ラジオ放送が始り、デパートに銀ブラ、そしてシネマ、カフェ、ダンスホール、レストランなど、帝都・東京にも大衆文化が花開く時代となった。しかし大正１２年 (1923) の関東大震災あたりを境に様相はまた変わる。普通選挙法の実施と併せ治安維持法も強化、金融恐慌の勃発とともに経済は混乱し全国的に社会運動が激化した。銀座のカフェの名前にも、「美人座」「バッカス」「クロネコ」「ナナ」「タイガー」「プランタン」など見られ、暗くまた享楽的な気分が漂う。やがて時代は国粋主義的な軍事体制に急テンポで進む。そして日本は中国大陸に進出、日中、日米が戦う第二次世界大戦を迎える。重雄氏が神田で活躍するのは、昭和初年から１０年代頃、ちょうど壮年期にさしかかる３０才代後半から４０才代半ばにかけてだろう。

まず初めに、洋書専門の輸入商社「大同洋行」を石本男爵（加藤シズエ前夫）らと起こした。そしてまもなく、神田神保町のすずらん通りに面した一画に、レストラン「メッチェン Madchen」を開店させた。学生や文化人が溢れる街・神田神保町にモダンな名物の洋食店が誕生した。「メッチェン＝少女」とは、店名からして、当時の学生言葉＝流行の先端を意識したものだ。店内には最新のプレーヤーが置かれ、洋楽のクラッシックや流行の音楽が流されていた。日本に２台だけ輸入されたうちのひとつという大変高価なプレーヤーで、ビクターのレコード店の者が、新盤が発売される度に店に来て、ここで試聴したほどであったという。

現在の村松邸玄関に使われている美しいカットガラスの引き戸は、かつて「メッチェン」の玄関で、多くの客を迎えたものを移設したものだという。後に人間国宝になったガラス職人が、昭和９年 (1934) 頃に製作したものと伝えられている。また風呂場の窓に再生して嵌め込まれているステンドグラスも、店内の装飾に使われたものだという。重雄氏の店にかける思い入れは、かなりのものだったと思われる。レストランの食事の詳細は今となっては定かではないが、小学校に入る頃によく訪れたという並木昭子さんは、おいしいアイスクリームの味と白いエプロン姿のウェイトレスを今でも覚えているという。

しばし賑わいを見せたレストランの経営は時勢の変化に逆らえず、ほどなく閉店となった。調理人には、ホテルのメニューにも負けないほどおいしい料理を出すべく、食材をふんだんに使わせた。やがて廃業やむなくになったが、立派な西洋料理の職人は何人も育てることになった。使われていた食器や調理道具、店内を飾った品々は、閉店の後、郷里・桃園の村松家に運ばれた。そして戦火を逃れて、郷里に疎開した村松重雄氏一家も、終戦までの苦しい時期を同じ家で過ごすことになる。捨て置かれたままの「メッチェン」の遺物は、今ではほとんどが散逸している。残された手動のコーヒー・ミル、配膳台と思しきしっかりしたテーブル、レコードがつまったままの木製の収納ケースなど、わずか残された品々からかつての情景を思い浮かべるしかない。

[2] 村びとが見た村松家の眺め

「廃屋」と題する八ツ切りサイズの小さな水彩画を興味深く拝見した。村松邸建築の経緯とその文化的な背景や趣味の水準を語るのなら、すでに紹介した主屋書院の美しい違棚や壁、中座敷の襖絵について詳しく論ずべきであるが、周囲の村びとが村松家をどのように眺めていたかを考える手立てとして見ると、なかなか意味深く感じられはしないか。そこには、写真ではうまく見えない、周囲からの「視線」が含まれている。

昭和５年 (1930) に開通した峡西電鉄、通称「ボロ電」（当初は甲府電車軌道（株））が、敷地のすぐ西を走っていた。今、廃棄道と呼ばれるかつ

ての線路は、この辺りでは、しばらく国道と併走していた。当然、村松家敷地を削って線路が敷設されたはずだ。そして、桃園神社をバックに「桃園駅」のプラットホームができた。絵は、このプラットホームからの眺めである。甲府方面、あるいは青柳方面へ向かい毎日乗降りする地域の住人にとっては、いやおうなく目にする駅前の村松家は、きっと印象深い風景であったに違いない。

この絵を描いたのは、当時、桃園に住んでおられた画家・滝沢忠三氏だと思われる。（1946,10 Takizawa とサインあり）画家でもある蓮経寺住職・深沢春雄氏によれば、戦中は村内に疎開していたそうだ。また並木昭子さんの記憶では、地元の小学校の先生をされていて、展覧会の絵を見た知合いが知らせてくれ村松家でいただくことになったという。滝沢氏はその後、中央の公募展に出品しながら県内の美術団体「白涛会」の中心メンバーとなり活躍した。峡西電鉄の建設は、地域には馬車鉄道以来の大きな出来事であったが、当時の当主・重雄氏はちょうど東京の神田で活躍し始めた時期に当り、かかわりがあるとはいえ積極的に尽力する立場にはなかったのかもしれない。

それにしても「廃屋」とは、正直なタイトルであった。村びとの多くは、そのような眼差しを向けていたのかもしれない。広大な敷地に亡霊のような大家が建っていたのだ。倒れようとする塀囲いを無造作に棒が支えている。屋根の一部も壊れているかに見える。数本の大木に囲僥され、風情があると言えばありそうだが、その荒れはてた不思議な感じが、ふと画家の心を捉えたのだろうか。屋号で「イロ（にんべんぐち）」の家と呼ばれていた村松家。当時この中には、重雄氏一家が、ひっそりと暮らしていた。重雄氏はもう５０才代になっていた。戦後まもなくで誰もが逼塞していた毎日、当家にとっても農地改革など難しい時代であったろう。しかし、何やら過去そのままの大家に向けられる周囲の眼差しとは裏腹に、木樹に囲まれた家のなかには、意外にもほっとした静かな時間が流れていたのかもしれない。三女は、巨摩高女に通いながら夢多き思春期を迎えていた。そして村松家の戦後が始まる。

5　名望家・村松家の生き方

手元にある確実な資料『臨床応用 硯北日誌（上）』（勝格弥）の、明治８年 (1875) ～明治１６年 (1883) の間の記載と残された文献資料に散見されるエピソードに、既によく知られている明治前期の史実を重ね合わせて、村松家の生き方をやや雑談風にスケッチしてみる。県下近隣の名望家と対照した、その特色は、もちろんメインテーマであり、繰り返し問われるべき課題である。これに向け詳しい調査も進められるている。筆者の力量からすれば、無理を承知で書くことになる。現時では、関係者とともに語り合ったお話と受けとめていただき、先につなげていきたい。

[1] 明治前期の状況

明治前期の山梨県下の状況と政治意識については、望月直矢が明治２１年 (1888) に著わした『峡中沿革史』で、すでに明確な見解を残している。優れた同時代史な証言として、その後も「近代山梨の出発」を語るのによく引用されてきた。つまりは、明治維新以来の２０年間で、「有形文化」は迅速に進んだが「無形文化」の進歩は遅々として進んでいない。明治５年 (1872) の「大小切騒動」への徹底的な弾圧が、時代に立ち向う県民の精神を極端に畏縮させてしまったという。この直後、明治６年 (1873) に着任したのが若き県令・藤村紫郎であった。税制改正への不満はむしろ県民自身による殖産興業へと向けられてゆく。そして、国会開設を目指す民権運動が全国的な広がりを見せ始める。県下においては、幕末から維新に向かう変革を政治的な敗北としなければならない士族層は皆無であった。そもそもが風土として、極めて具体的な日常の実利が問題であった。自家の浮沈にかかわる経済はもちろん、学校教育や殖産興業、道路や鉄道の敷設など身近な村共同体の近代化、そして天下国家にかかわる政治変革。これらの相矛盾する課題を引受け、新時代に希望を抱いたのは、ごく限られた豪農層に属する地域の名望家の若き青年たちであった。

明治１３年 (1880) に遊説で来県した自由党・板垣退助の演説を、勝格弥も甲府の亀屋座に出かけて聞いている。板垣退助は高知に帰郷してからの演説で、「田舎甲州」に触れ、「人文欠乏の弊」を指摘している。たぶんに地元へのリップサービスであったとしても、外からは確かに、人心後進の地に見えていたのだろう。同様の感慨は、藤村紫郎県令を支え山梨に深く関わり、その後甲府に定着した富岡敬明家の取材でも、子孫からの伝聞として伺ったことがあった。望月直矢が指摘する現実への自意識は、八巻九萬、薬袋義一、古屋専蔵、依田孝、小田切謙明、加賀美平八郎ら民権家として活躍する青年の共通のものであったと思われる。そして、格弥もまた多忙のなかで変革への尽力を惜しまなかった。しかし明治１２年 (1879) の国会開設詔勅発布以来、状況への対応は齟齬をきたし運動の足並みは乱れる。保守派・依田孝らと民権派・小田切謙明らの対立が激化し運動は急速に衰退しつつ、峡中自由党、峡中改進党等の結党を経て、やがて明治１６年 (1883) の峡中立憲党の結成に集約されていく。

[2] 名望家の様々な動向

格弥は、明治１３年５月９日付の日記に、依田孝宛一文を次のように記す。

「與依田某書・・・・吾其人ヲ視ル未ダ真ノ民権家ナルヲ観ザルナリ、僕君ニ於テ初メテ之ヲ視ル嗚呼依田君ノ如キハ真ノ民権家ト謂ベシ、僕身ヲ医林ニ潜メ術拙才疎当世不容徒ニ跡ヲ医トノ間ニ蔵スルモノナリ、何ゾ会テ当世ノ事ヲ談ズルニ暇アランヤ、然レドモ其志アリテ・・・」。医家として立ち、自家を盛りかえしつつ、時代に立ち向おうとする青年・格弥の純粋な思いが伝わる。

依田孝（1851 ～ 1908）は、市川大門村に生まれ、若くから頭角を見せたほぼ同世代の同志、区長や県議を経て県議会副議長に選ばれる一方、「峡中新報」株主総理、私塾「進徳社」を創立するなど初めは藤村県政に鋭く対峙。峡中同進会の国会開設運動をリードし上京するなど、自由民権家として多彩な活躍を始めていた。翌、明治１４年 (1885) の外国との不利な生糸取引きを改善すべく、横浜生糸荷預所争議に県下総代として奔走したが失敗、後の転向への伏線となる苦い挫折を味わっている。

日記に登場する行き来のあった人物は多彩だ。維新間もない山梨を殖産興業と文明開化にリードした藤村紫郎 (1845 ～ 1908) は、まだ３０才代半ば。１４年に及ぶ県政、とりわけ前半期の活躍はめざましい。旧水戸藩出身の佐野広乃 (1853 ～ 1882) は、藤村県政に対峙する「峡中新報」の主幹を勤め、県下自由民権運動のリーダーとして活躍、また河野広中らと愛国社の全国的な動きにも連動、県下民権派を結集した峡中自由党の結成を目指したが実らず、まもなく明治５年 (1882)、惜しまれて病死。依田孝、田辺有栄が太政官に提出した「国会開設請願書」は、佐野が起草したものであった。格弥も追悼詩を残している。立場を異にしてもなお、外来の先進的知識層が県下の近代化に与えた影響は多大であった。

同時代の人物を日記を下敷きにさらに俯瞰して見よう。南部の本陣・近藤家に生まれた近藤喜則 (1832 ～ 1901) は、若くして郡中惣代を勤め、韮山の江川坦庵に私淑、加人イビーを招きキリスト教の山梨への伝道の端緒となったばかりか、峡南の地に「蒙軒学舎」を開き教育に勤め、物産会社「殖産社」を起した。また義立南部病院の開院に奔走し、いち早い近代医療の導入に努めた。若き俊才として藤村県政を支え県議会議長も勤めている。

西山梨郡飯沼村に生まれた小田切謙明 (1846 ～ 1893) は、若くして戸長を勤めまた貸付会社「補融社」を起した。藤村県政を批判、県下初の自由党員となり終始その立場を貫いたが、総選挙では敗北を重ね、ついに中央政界への夢は果たせなかった。竜王村丹沢家に生まれ、後に、西八代郡大塚村薬袋家養子となった薬袋義一 (1854 ～ 1903) は、県議また「峡中新報」社主として活躍、峡中立憲党の中枢にいたが、まもなく転向、北都留郡長を勤め、明治２５年 (1892) の第２回総選挙で初当選、衆議院議員として重きをなした。村松家に残されていた、薬袋義一を推す未使用の選挙チラシは、たぶんこの次の選挙に向けて使用されるものだったのだろう。

民権派の拠点「峡中新報」の経営を支えたのは、若き加賀美平八郎であった。県下屈指の豪農・加賀美嘉兵衛の長男として生まれた加賀美平八郎 (1861 ～ 1933) は、やや次の世代になる。民権派を実質支え、また私塾「成器舎」を設立、 第２回総選挙で初当選、衆議院議員として活躍しながら、山梨農工銀行の頭取を勤めたが、やがて経営にいきずまり没落していった。その劇的な退場のドラマを多くの人が目撃することとなった。

このあたりの事情を簡単にまとめれば、「・・・当時全国に充満していた知識分子である「不平士族」が旧幕領ゆえに層としては存在しなかったため、県民の不平不満を普遍的原理（自由民権）に照らして正当化し質的に高め、自由民権運動の全国的潮流に県民を参加させていくという過程が近隣諸県にくらべ進展せず、県民が天下国家問題への想像力をきたえられる機会が乏しかった・・・」（『山梨県の百年』有泉貞夫）と、ひとまず総括される。その結果が、中央から地方への利益誘導型の政治に早くから偏り、県下山間地の広大な入会地の官有化への抗議も曖昧にし、目先の無責任な山林乱伐につながり、明治末期の水害被害を大規模にさせる遠因になったと言われる。貧乏県への下向きのスパイラルは、すでに明治中頃に始る。その流れからすれば、是非はともあれ、明治後期から、村松家の資本投下が次第に県外に向かい、経済活動の中心が東京、横浜に移るのも当然のことであった。

名望家の様々の動きをみると、学校の建設も、地域の振興も、そして近代的な医療体制に向けた努力も、けっして村松家・勝家だけの問題でなかったことが、手に取るようにわかる。むしろ成功しなかった試みの方が多かったことだろう。これら一群の動きと比べれば、村松家の動向もひとつのユニークな類例に見えてくるはずだ。そして、消えていった手づくりの私塾からは、次の政財界を担う逸材が育ちつつあった。

[3] 若尾逸平の活躍

若尾逸平 (1820 ～ 1913) は、この時期すでに、豪農資本家として確固たる地盤を築きつつあった。文政３年 (1820)、中巨摩郡在家塚村（南アルプス市）に若尾林右衛門の二男として生まれた若尾逸平は、１８歳の時、剣客を志し上京（江戸）したがまもなく帰郷、安政２年 (1855) に甲府に居を構えるまで、当地の葉煙草の行商を営んでいた。２７歳で小笠原の若松屋に婿入りしたが、７年目にして離縁し再び行商を始める。やがて商人として頭角を現し、安政５年 (1858) に細田利兵衛の娘・はつと結婚、甲府の山田町に店を構えた。

横浜開港とともに、若尾逸平のめざましい活躍が始まる。いち早く外国との貿易に参画、甲州から生糸や水晶を運び外国商人と取引きを始めた。また新しい製糸器械を考案し、製糸業にも乗り出し着々と利益を手にした。変動の激しい生糸相場を利用し商売に励み、やがて巨万の富を築いた。明治４年 (1871) には、県下の養蚕製造人大総代に、翌年には生糸改会社副社長になり、県下の蚕糸業を支配する立場にあった。若き藤村紫朗県令の殖産興業を積極的に支援、明治１０年 (1877) に設立された第十銀行（現在の山梨中央銀行の前身）では最大出資者となり、山梨県下一の富豪となった。「株式は明かりと乗り物に限る」と、当時めざましい進展を見せ始めた帝都・東京の電力産業と鉄道事業に積極的に投資し、財界に一大勢力をなした「甲州財閥」の雄となった。横浜正金銀行取締役、初代甲府市長を勤め、後に若尾貯蓄銀行を創立。明治２３年 (1890) の帝国議会では、貴族院多額納税議員（全国で第３位）に選ばれた。高齢の９４歳まで長生きし、大正２年 (1913) に没した。

隣接する在家塚村出身の若尾逸平の活躍は村松家に多大の影響を与えた。

それは、早や行商人や小資本家として模索し始めた頃からだろう。後の、横浜正金銀行へのかかわりだけにとどまらない。様々な事業展開から私事の付き合いにまで及ぶ。民権運動の一翼を担った勝格弥に比べ、村松正次郎はまた幅のある動きをみせる。若尾逸平らと交わりつつ中央の政界ともつながり、経済人として活躍を広げていく。

[4] 名望家のなかの村松家

名望家たちとは、明治憲法の帝国議会に代議士選挙権を持った者、つまり直接国税納入額１５円以上、ほぼ所有田畑二町歩以上に当たる地主と、とりあえずは考えられる。そして政治にかかわった多くの豪農名家が没落していった。近代日本がおかれていた、その都度の国際情勢もその消長を大きく左右した。「金で一代、田畑で一代、山で一代」、最後に残ったのは井戸塀だけであったというドラマは、無数にある。しかし、その内実は様々だ。それぞれの地域的な背景を持ちつつ、すべての豪農層が、政治運動にかかわった訳ではない。むしろ多くは日常の経営に沸々と邁進していたことを忘れてはなるまい。多くの民衆が、その意識を共有するのにはまだ、かなりの時代を待たねばならい。

近代史研究の有泉貞夫氏は、『明治政治史の基礎過程』『山梨県議会史』『やまなし明治の墓標』以来、明治前期のこれらの群像を一連の政治史として取り上げ、中央と地方のダイナミックな連関に注目しつつ刺激的な論考を発表されている。県史編纂の成果を『山梨県史（近現代・通史編）』で、どのようにトータルにまとめられるのか、興味深くお待ちしている。好奇と希望をもって迎えた山梨の御一新は、「大小切騒動」後の、文明開化の喧噪と民権運動の隆盛と衰退という小さなドラマを経て、ようやくほんとうのスタートラインについたのではないかと、私は感じている。

ともあれ、そんな時代を、村松健斎は明治１８年 (1885) まで生きる。勝格弥は依田孝と、そして村松正次郎は加賀美平八郎とほぼ同じ世代である。「清吟書屋主人」・健斎翁の爆発的ともいえるその闊達なエネルギーは、時代の変革期特有のさらなる後押しを得てパワーを増し、次代の勝格弥、村松正次郎の二人に受継がれる。医家あるいは政治家としての思想性はたぶんに勝格弥に、政治の成り行きを見越した企業家としての商才は、むしろ村松正次郎に、あたかも車の両輪のように受継がれたのではないか。これは特色ある事例であろう。それが、いかように展開されたのか。あるいは展開されようとして果せなかったかを、見ていかなければなるまい。複眼的な柔軟な目で、さらに調査を進めてみたい。

・エピローグ～残骸からのまぼろし～

三月 (2006.3) も後半になって、修復が進められてきた村松家の全貌がようやく姿を現した。周囲の住人も道行く人も、囲いを取り払われ姿を現したばかりの新たな景観に、驚きの眼差しを向けていた。まだ見慣れているはずがない。その驚きと喜びは、関係者とて同じことだ。それは、村松家の方々や修復工事に携わるすべての人々が、長らくそれぞれの記憶のなかで暖めてきたイメージであったからだ。朽果てるにまかせられていた、あの埃だらけの旧宅を知る関係者なら、この数年来の労苦を思い出しつつ、まさに「残骸から現れた幻」に見えたかもしれない。

数年前、我々の前にあったのは、巨大な残骸であった。事実、それはいかにも古めかしくやっかいなものあった。よくここまで残ったとも、また、こんな姿でしか残らなかったことを惜しむ声も聞いた。かつて暮らしを飾り立てていた装飾、道具はもとより、貴重な文献、書画も多くは散逸していた。昔を知る当家の遺族からすれば、複雑な思いがあったことだろう。しかし、私は、よく残った希有な事例だと受けとめている。目の前に見えているものは、高々これだけかもしれないが、そこには百年、二百年あるいはそれ以上の時間が凝縮されている。なし得たことと、なし得なかったことが幾層にも重なり無言のまま残されている。それぞれの立場の想像力が試されていると、やがて気付いた。初めにそれに気付いた人の見識は、なかなかのものだ。「見えないものを見る意志」により、風景はまた奥行きを増す。

土を曝しこね合わせ、さらに試しながら修復に臨んだ左官も、取り寄せたサンプルの方が多かった不満げな石工も、初めは言われるままに昔の道具をスケッチし始めた美大の学生たちも、そして関係した誰もが、やがて、このような意志を誠実に果そうとする人となっていた。「残骸からのまぼろし」の美しさは、たぶん、そこにあるのだろうと今は思う。

実は村松家の活躍は、当地にとどまるもにではない。やがて、山梨から東京、横浜へ。そして後には、海外にまで活躍は広がる。この桃園の家は、それらすべての動きを見つめ今につなげる重要な基点である。その大切さはこのうえない。背景調査もまた同じ「見えないものを見る意志」をベースにしてきた。もちろん、かってな幻想であってはならない。そんな意志を持った目がたくさんあれば、大きな成果が期待できる。この家の物語に益々深い思いを寄せているのは、私だけではあるまい。是非、多くの人と「まぼろしの美しさ」を共有したいものだ。

文責　高橋辰雄